
『廢人無職青年成敗物語』

統合失調症無職青年

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

『廃人無職青年成敗物語』

【Zコード】

Z0560M

【作者名】

統合失調症無職青年

【あらすじ】

統合失調症二一ト前科者・廃人無職青年こと、谷垣直人。邪悪な性格を持ち、民自党の工作員でもある谷垣に今、天誅が加えられようとしていた。東京都青少年健全育成条例改正問題に関する発言やエヴァはつまらん発言を問題視した三人の二一ト、近藤春雄、箕輪晴子、河村英樹が谷垣の襲撃計画を練る。ひとり悦に漫る悪魔ゼバル。谷垣の運命はいかに？

今、二一ト対二一トの戦いが幕を開ける。

第一章 廃人無職青年、自身の終わりを確信する

アメーバブログ「廃人」一トは小説を書けるか？」管理人・廃人無職青年こと、谷垣直人は気分が悪かつた。かつて自分が迷惑をかけたサイトにアクセスしてしまったのだ。谷垣は統合失調症を患い、暴行事件を起こして逮捕・精神科に強制措置入院させられた過去をもつ二ートである。ブログではあまりほめられた出来ではない小説を五作、発表していた。

（何でアクセスしてしまったのか。また色々と言われるじゃないか）

谷垣はかつて、そのサイトの管理人のことを自分のホームページで執拗に誹謗中傷するだけでなく、URLとメールアドレスだけでなく、リンク先も晒していた。関係のない人に誹謗中傷メールを送つて回つたりした。

谷垣の頭に、悪い妄想が次々と浮かんだ。ブログの閉鎖、パソコンの没収、精神科への入院。

（もう俺は終わりだ）

谷垣はなぜか自分の人生がその被害者によつて終了させられるような確信を抱いていた。終わるとなると、不思議に谷垣の気持ちはふつきた。

（終わりだ。終わり。・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・）
くくくくく、はははははははは。そつだ。終わるなら、
終わればいい。俺の人生は糞だ。母親は統合失調症で人に迷惑をか

けてばかり、俺は俺でネットで他人に迷惑をかけ、就職に失敗し、統合失調症を悪い、拳句に発狂して暴行事件、精神科への入院・通院、投薬。終わってる。俺は、もう十分すぎるほど終わってる。どうせ就職もできないし、結婚もできないだろう。俺は終わった人間だ。もうどうなるが、知ったこっちゃねえ。怖いものなんてねえ。
ひへへへへへへへへへへへへ

谷垣は自分のブログにかつて自分が犯した愚かな悪行を記すことにして。さりげなく、被害者への悪口を添えて。そこにこの男の邪悪さが垣間見えていた。谷垣直人とは異常な人格の持ち主で、ころころ気が変わり、自分でもそれについて悩んでいた。何かに思い悩んだかと思えば、すぐさま忘れ、反省したかと思えば、開き直る。謝ったかと見えれば、次には相手を非難する。そんな谷垣の母親も気まぐれな人間であった。あるいは、母親から遺伝した性質であったのかもしれない。

辺り一面の枯れ木に身を沈め、谷垣の様子を見つめる者がいた。悪魔、ゼバルである。この悪魔こそが、谷垣に取りつき、いろいろに操り、暴行事件を起こさせた張本人であった。

(いいぞ谷垣。お前はまた災厄を自ら抱え込んだ。またお前の苦しむ様が見られて、俺は嬉しいぞ)

ゼバルは残忍な笑みを浮かべ、谷垣から谷垣に災厄をもたらす者たちへと視線を移した。

マクドナルドに三人の人間がテーブルを囲んでいた。

「この廃人無職青年という男、まだ悪事を隠していたか。まだまだ隠しているのかもしれない。やはり、この男、天誅を加える他はないのである」

近藤春雄が携帯電話を覗き込んで言った。画面には、廃人無職青年のブログが映し出されていた。近藤は大学中退の一ートである。

「そうですよ。こいつはそれだけでなく、暴行の前科もありますし、続失という本物のキチガイです。危険極まりないでしょう。野放しにすることなんて、できないですよ」

箕輪晴子が口をとがらせている。箕輪は高卒の一ートである。

「だな。俺もこいつがここまで悪党だとは、思わなかつたぜ」

ヘルメットの様なマスクをつけた男、河村英樹が言った。河村もご多分にもれず一ートであった。河村は廃人無職青年とはちょっとした知り合いで、メッセのやりとりをしたこと也有った。

近藤、箕輪、河村の三人は、かつてある事件でともに戦った戦友同士であった。そのときの戦いにはもつひとつひとり参加していたのだが、今日は一緒ではなかった。

「東京都青少年健全育成条例改正に積極的に反対しないばかりか、反対運動を冷笑するような発言をしたり、エヴァをつまらんと切つて捨てたり……。そんな人間は、悪人に決まっているのであ

る

近藤は険しい表情である。近藤と箕輪は、それらの発言から、廃人無職青年を条例改正案推進派の破壊工作員であり、日本アニメ失墜を計画していると睨み、廃人無職青年を懲罰しようとした。今日は廃人無職青年と知り合いの河村に、廃人無職青年を呼び出し、襲撃しようという作戦会議の日であった。

「で、何で呼び出せばいいんだ？」

「漫画やアニメの」とドヤリ笑いつぶやいて話したことでも言えぱいいのである

「あー、それでいいんじゃないですか」

「うん。俺もそう思つ」

「それでは、今すぐ連絡を取るのである」

「今すぐ？ 急な話だな」

「」とは一刻を争うのである。しつこい間にも、廃人は破壊工作を進め、着々と日本アニメを滅亡せしめようとしているのである。さあ、早く！」

近藤が河村をせかした。河村は携帯電話を取り出し、廃人無職青年のブログにアクセスした。

廃人無職青年 谷垣直人の身に、危険が迫るうつとしていた。
しかし、谷垣はそうとは知らず、むしゃくしゃしながらキーボード
を叩くのに忙しかった。

第一章 廃人無職青年スケベ伝説

谷垣は自分のブログの「メント欄に寄せられた河村のコメントを読んでいた。

「今度、会って話さないか？ アニメや漫画について、熱く語り合
せ！ な、いいだろ？」

（別に会って話すようなことはないな）

谷垣は返事をしたためる。

せっかくのお誘いなんですが、人見知りな性格でして。そんなに話好きというわけでもないですし。お誘い、ありがとうございます。そして、すみません。

（「なんだいいだろ）

谷垣はブログにアップする記事を書き始めた。最近は書くネタに困り気味で、以前はなかつたアニメの感想カテ「ワリー」を新たに追加し、毎日見たアニメの感想を書いていた。今日は今さつき見た「いちばんうしろの大魔王」最終回の感想である。このアニメは、ファンタジー・コメディアニメとも言つべきもので、将来魔王になると予

言された少年が主人公であった。

「おい、こいつなんか断つてきたぜ」

まだマクドナルドで作戦会議に参加中である河村が、谷垣の返信を読んで面食らっていた。

「どうするよ?」

河村は近藤と箕輪を顔色を窺つた。

「何度もアタックするのである! 何としても誘い出すのである! 破壊工作員ひとりを滅することは、日本アニメの将来に明るい兆しをもたらすこと、間違いなしなのである! 絶対にこの作戦は完遂しなければならないのである! それなのに、序盤の序盤で躓いくわけにはいかないのである! む! 春雄はいいことを思いついたのである!」

近藤が笑顔を浮かべた。

「何ですか、それ?」

箕輪が興味を示す。

谷垣は感想を書き終えた。再び河村のコメントが付いている。

「そう言つなよ、廃人無職さん。とつておきのネタ、教えるぜ。なんと、俺の知り合いの美人の女子も一緒に連れていきます！俺が廃人無職さんのこと話したら、是非会わせてくれって言つてきかないんだ。美人だぜ、美人。廃人無職さんも会いたくねえか？ どうだ？」

（美人だと？）

即座に谷垣の食指が動く。谷垣は無類の面食いで、美醜にうるさく、こだわる男であつた。谷垣の指が素早くキー ボードを叩く。

「へえ、美人ですか。例えはですが、有名人で言えば誰に似てますかね？」

谷垣はしばらく河村の返事を待つ。

谷垣の部屋のドアが出し抜けに開かれた。角刈りのいかつい顔をした男が顔を出す。目つきが鋭く、年の頃は三十代と思われた。

「またパソコンですか、直人さん。お好きなことですねえ」

男の声にはどこなく険が感じられた。谷垣が露骨に嫌そうな顔をして言った。

「佐藤さん、入る時はノックしてくれつていつも言つてるじゃないですか」

谷垣の抗議を受けても、佐藤と呼ばれた男に悪びれる様子は見られない。

「ノックねえ。必要なんですかねえ、そんなもん。どうせ直人さん、ろくなことしてないでしょ？ アダルトサイトや下らんアニメ見たり、つまらんブログ更新させてるだけじゃないですか。要らんでしょ、ノックなんて。あんま変なもん見ないで下さいよ。お父様からそう仰せつかつてるもんでね。困るんですよ、またイカれて事件でも起こされたら。お父様は今大変な時期ですからね。そんなときに、ふー太郎の息子が馬鹿やらかしたら、致命傷になりかねない。この意味、いくら直人さんでも、わかりますよねえ？」

「わかつてますよ。・・・・・用はそれだけですか」

「ええ」

「なら、もう出てつて下さー」

「はいはー」

佐藤は出ていった。

(清の野郎、俺のことなめくさりやがつて。くたばりやがれ)

谷垣は心の中で佐藤に呪詛を吐く。佐藤清、三十四歳。谷垣の監視役にと父親の民自党総裁・谷垣一禎が連れてきた男だが、谷垣はその素性をまるで聞かされていなかつた。ただやくざな雰囲気が漂

う、怒らせたくない男だとこいつは、何となく思われるを得なかつた。

河村の新しいコメントが付いた。

「やうだな。綾瀬はるかにそっくりだよ。もつ無茶苦茶似てるー。綾瀬激似だぜ？ 絶対会いたくなつたろ？」

谷垣はすぐさま返事を書く。

そりゃあ、もう。是非会いましょう。いっししますか？

谷垣は早くも予定を考え始めていた。それが甘い罠とは知るよしもなく。

第三章 ファーストコンタクト

「どうわけで、ネットで知り合った人と次の日曜日で会うことにしました」

谷垣は河村たちと会うことになった件について、佐藤に告げた。なぜこんなことをするかと云ふと、谷垣には外出時にも佐藤の監視がつくようになっていたからであった。決めたのは父の一禎である。

「はあん。で、どういったお知り合いなんですかね、その人たちとは？」

佐藤が露骨に胡散臭そうな表情でいる。

「だから、ネットの知り合いですよ」

「アダルトサイトの？」

「違いますよ。何言つてんですか」

「何人と会うんでしたっけ？ 野郎だけですか？ それとも女も？」

「それぞれ一人ずつとこう話です

「ははあん。女田当てですね。図星でしょ？」

佐藤は谷垣を馬鹿にしきつた眼差しを送った。

「まさか」

「まあ、何でもいいですけどね。馬鹿やらない限りは」

それだけ言うと、話は終わりだとばかりに、佐藤は谷垣の前から姿を消した。

（本当に嫌な奴だ。死ねばいいのに。また呪つてやるか）

谷垣はノートとハサミを取り出した。ノートに切り込んでいく。人形に紙をかたどる。紙の人形の完成である。その紙人形に佐藤清と書く。谷垣は紙人形を細かく切り刻んでいく。これは、谷垣が独自に編み出した呪殺方法であった。

次の日曜日、午後一時。谷垣は渋谷駅のハチ公前を目指していた。そこが河村たちとの待ち合わせ場所であった。

（綾瀬はるかに激似か。会うのが楽しみだ。久しぶりにわくわくする。これはこの何年かはなかつた感覚だな）

谷垣はすぐに会うことになる美人のことを思うと、不思議に足取りが軽くなるような気がしていた。谷垣の脳裏には、完全に河村のことは忘れさせていた。美人のことしか頭にない男であった。

「どんな奴なんでしょうね、廃人無職青年」

箕輪が近藤に聞いた。

「つむ。おやじく、人相の悪く、不格好にして不細工な冴えない中年男だろ? と春雄は予想しているのである」

「ですよねえ。スパイだし、エヴァとエヴァファンのことを受けなしてましたからね。きっと芸術がわからない、物凄く鈍感な奴ですよ」

近藤が腕時計を見た。

「もう時間なのである。遅いのである。もしや、かんづかれたか?」

途端に近藤の顔が険しいものに変わった。

「それはないですよ、先輩。しかし、それらしいのは来ないです。なんでしたっけ、特徴」

「黒ぶち眼鏡に黒ズボンで来ると言っていたのである」

谷垣は既にハチ公前の近くまで来ていた。遠くから、様子を窺つていたのである。佐藤も一緒だ。

(とこ)に綾瀬はるかがいるんだよ。騙しか?

谷垣の頭に自分が担がれたのではないかといつ疑惑が浮かんだ。携帯電話を手に取り、河村から聞いた携帯電話のメアドにメールを

送る。

私が、ハチ公前まで来てるんですが、本当に来てますか？

すぐに返事が届いた。

いるのである。黒ズボンに眼鏡をかけたのが、俺である。俺の隣には、話した彼女がいるのである。待ってるから、すぐに来てくれるなのである。

(本当にいるのかよ)

谷垣は半信半疑であつた。佐藤が谷垣の顔を覗き込む。

「はめられたとかないですよねえ？　ま、ネットの人間関係なんて、いい加減なもんだとは思いますけど。騙されたとしたら、恥ですね。いい年して、スケベ心につられて、まぬけ面晒して、何やつてんですかねえ。やれやれ

佐藤の毒舌は容赦がなかつた。さすがに谷垣もむつとした。

「まだ、騙されたと決まつたわけではないです。ちょっと行つてきます」

谷垣はハチ公像に近付いていく。

「はいはい、お供しますよ」

佐藤も従つ。

「黒ふち眼鏡に黒ズボン・・・・・。先輩、あれじやないです
? 来たみたいですよ」

箕輪が近藤の肩をつつき、ある人物を指差した。近藤が指差し先を眺めた。一重顎で小太りの男が、向かつてくる。

(「Jの男が、日本アニメ滅亡」を田論む、悪の工作員・・・・・)

近藤は「J」へりと唾をのみ、喉を鳴らした。

谷垣も近藤と箕輪を眺めた。

(綾瀬はるかじゅねー。はめられた。ガリガリ骨女じゅねえか。誰得だよ)

一瞬、このまま何事もなく通り過ぎ、帰宅してしまえといつ考えが頭をよぎる。それを実行しようとかと思ったとき、骨女が声をかけてきた。

「あの、廃人無職青年さんですよね？」

「え？ え、ええ、そうですよ」

違うと答えればよかつたと谷垣は後悔していた。

「あなたが、『俺がゼロ様』ですか？」

谷垣が近藤を見て言った。河村はネットで「俺がゼロ様」というハンドルネームを使っていたのであった。

「うむ。いかにも、俺がゼロ様である。宜しく頼むのである

(なんかネットとキャラが違うような気が)

谷垣は近藤に違和感が感じられて仕方がなかつた。

第四章 悪魔、再び

谷垣が骨女が肩にさげているものを見て言った。

「それ竹刀袋ですよね？ 何で持ってるんですか？」

骨女の表情に焦りの色が混じった。

「ああ、これですか。道場行つてきましたもん」

「そうでしたか。・・・・・それで、お名前は？」

「えつと、伊藤仁美です。宜しくお願ひしますね」

伊藤と名乗った骨女が一礼する。

「伊藤さん。はい、いらっしゃる」

谷垣も頭を下げた。

「どちらの方はどうやら様ですかね？」

伊藤が佐藤を見つめて訊ねた。

「この人はですね」

「佐藤清。お守りでついてきた。気にしないでくれ」

佐藤が谷垣の言葉を遮つて発言した。

「それでは、ゼロ様が案内するのである」

ゼロが歩き出す。

「どこへ行くんですか？」

谷垣がゼロの後を追いながら聞く。

「ついてくればわかるのである。話しているのは、時間がもつたらないのである」

ゼロはどんどん先を歩く。

谷垣は、自分たちが段々と人気のない、さびれた場所に足を踏み入れてしまったような気がしていた。

（なんか人が少ない、寂しい）といふに来ちゃつたなあ。この人、何考えてんだろ）

谷垣は漠然とした不安に包まれた。

「すいません、どこへ行かれるんですか？ そりそり教えてもらつてもいいんじゃないですか？」

「もうすぐである」

ゼロはにべもなく答えた。

「もうすぐですって」

骨女が笑顔を見せた。谷垣は何となく、それがきこちなく、胡散臭いものに感じられた。

「そわそわするなつて。みつともないですねえ。黙つて歩きましょ
うよ」

佐藤が苛立たしげに吐き捨てた。

（こいつ。・・・・・しかし、どこに行くんだ？　この先には、
何もなさそうだが）

「まだ気がつかないとは、いつまでも鈍い男だな、直人。お前は、
はめられたんだよ」

谷垣の耳に老人の声が飛び込んできた。聞き覚えのある声だ。声
優・家弓家正の声である。家弓はアニメ映画『風の谷のナウシカ』
クロトワ役、『クレヨン shin-chan 爆発！温泉わくわく大決戦』
アカマミレ役、『GHOST IN THE SHELL』／攻
殲機動隊』人形使い、テレビアニメ『ラーゼフォン』エルнст・
フォン・バーベム役、『鋼の錬金術師 FULLMETAL AL
CHEMIST』お父様役・ナレーション等で出演しているベテラ
ン声優で、谷垣が大ファンの声優であった。だが、この場には家弓
の姿はない。谷垣は瞬時にそれが自分にしか聞こえない幻聴だと気
がついた。以前にも、家弓はじめ、谷垣が聞き知った声優等の声の
幻聴が聞こえたことがあったからである。

(馬鹿な！？ 僕は処方された薬は飲んでいる。もつ幻聴は聞こえないはずだ)

「薬などで俺らを妨げる事はできない。俺らの力を甘く見るな。それより、お前はこいつらに止められた。ここにりは、お前を闇討ちにするつもりだ。早く逃げろ」

谷垣は幻聴の話に眉をひそめた。

(闇討ち？ 僕なんかを闇討ちしてどうする？ 僕は確かに民主党総裁の息子だが、それだけだ。何の得になる？)

「こいつは、お前が工作員であると見抜いてるのだ。お前の都条例改正問題についての発言も気に入らないそうだ。そして、お前が日本アニメを滅ぼそうと悪計を張り巡らせているとも考えている」

(日本アニメを滅ぼす？ 僕が？ そんなこと考えたこともない。馬鹿馬鹿しい。またお前らのでまかせか。もつ驅れんぞ)

「HヴァヤHヴァファンの悪口を書いたのが災いしたのだ。悪いことは言わん、今すぐ逃げろ」

(やつやつて俺に恥をかかせる氣だろ。その手は食わない)

「なら聞くが、この女はなぜ竹刀を持ってきている？ こんなもの、何に使う氣だ？」

(道場の帰りだと言っていたが)

「自宅に一戻らずに、そのまま渋谷に来たと？ 稽古をしたのな

ら、汗をかく。女子ならシャワーを浴びたいはずだがな。おかしいとは思わないのか、直人」

谷垣は少しだけ伊藤に疑惑を抱いた。

「まだ信じないか？　ならば、都条例改正について意見を聞いてみろ。こいつらは強硬な反対派だ。きっと反対するはずだ。ネットで話題になっている都庁襲撃の噂についても、眞実だと信じ、襲撃犯を支持するはずだ」

「突然で何ですが、ゼロさんと伊藤さんは今話題になっている東京都の漫画規制について、どう思いますか？」

ゼロを背後を振り返った。

「絶対反対である！　原石は邪悪な老害ファシストなのである！　芸術を規制しようなどと考へる奴は、悪魔の手先なのである！　都庁襲撃、万歳である！　正義の鉄槌が下されたのである！　くたばれ原石！　である！」

ゼロは興奮気味であつた。

「私も反対です。原石なんてじいさん、早くくたばっちゃえばいいんですよ。変に長生きしちやつて、迷惑です。都庁なんて襲われて当然ですよ。都庁の人間なんて、みんな死ねばいいんです」

伊藤が口を尖らせて言つた。

「ほり、言つた通りだろ？　まだ間に合ひ。直人、逃げろ」

谷垣は急に不安になってきた。

第五章 伝説の拳法

(なぜ)の一人が都庁襲撃を支持するとわかつたんだ?)

「未来が見えた、とでも言つておこいつか。それより逃げる。手遅れになるぞ」

谷垣は反転し、今来た道を走り出した。

「どうしたんです?」

佐藤が怪訝な様子である。

「先輩、こいつ逃げますよ!」

骨女がゼロに危急を告げ、谷垣の後を追つ。

「なぬ! 逃がすか!」

ゼロも走る。

「どうなつてんだ、まつたく!」

事態が飲み込めない佐藤も駆ける。谷垣、骨女、ゼロ、佐藤の順である。

「佐藤さん、そいつらは私の命を狙つてるんですよー。倒してくださいー。お守役でしょ?」

「何言つてんだよ、あんたなんか狙つたつて何になるんだよ」

佐藤は取り合わない。

骨女が竹刀袋から竹刀を取り出す。

—
•
•
•
•
•
•
L

佐藤はあけにとらわれている。

「佐藤さん、ここを昇ぐとかじでぐたわーよー」

「何なんたまつ!」
セイジの叫び

佐藤が急に猛烈なダッシュに入り、ゼロと骨女を抜き、その前に立ち塞がつた。

「ここは俺が防ぐから、先に行け！」

すいません!

谷垣は佐藤に礼を述べつつ、走り去つていった。

路地裏で近藤・箕輪と佐藤の戦いが始まった。

「めええええええええええええええん！」

箕輪が佐藤の頭を狙い、竹刀を繰り出す。佐藤が左へ避ける。竹刀は虚しく空を斬る。

佐藤の回し蹴りが箕輪の後頭部を捉えた。

「つ！」

箕輪が崩れ落ちる。氣絶した箕輪の腹に佐藤が蹴りを放つ。

「Jの外道！」

近藤が佐藤に接近し、張り手を送る。しかし、佐藤は後ろへ飛びさがつた。

「箕輪君、しつかりするのである！」

近藤が箕輪を抱き起こし、頬を叩く。だが、反応はない。

「箕輪君を一瞬で倒すとは。只者ではないのである」

近藤は張り手がいつでも放てるように身構え、佐藤と対峙した。

「あんた、原江神拳って知ってるか？」

「原江神拳？」

「スピリチュアルカウンセラーとかで有名な原江啓之が創造した伝説の拳法だ。武道を志す者の間では、神話と化している。俺は昔、原

江先生からそれを習つてたんだよ。あんたらが何者か知らないが、俺に喧嘩を売つた以上、この路地裏で昼寝してもらうことになる

佐藤が動きを見せた。拳をうつてきた。

近藤も手で払う。近藤は拳を払うのに夢中で、佐藤の足の動きには目がいかなかつた。

「一。」

佐藤の蹴りが近藤の左わき腹に入つたのだ。

「どうだ？ 効くだろ？」

「何がおかしい？」

「効かんのである。春雄には打撃は通用しないのである！」

佐藤の顔が笑みで埋まる。しかし、近藤もにやりと笑つた。

近藤は体当たりしようと佐藤に突進する。佐藤は回避する。再び近藤の突進。また佐藤は避けた。

（なんだこいつ？ サッカから突つ込むんできやがる。何を狙つてる？ 俺のスタミナ切れか？ それなら…）

佐藤は近藤の次の体当たりを待つた。

（来た！）

佐藤は近藤が間合いに来るのを待つて、地を蹴つて飛翔した。

「おーああああああああああああああああああああああー。」

佐藤の蹴りが近藤の顔に直撃しようとしていた。

(勝つたな)

しかし、近藤は顔をよけると同時に、佐藤の足を掘んだ。

「何だとー?」

「これを見ていたのであるー。」

近藤は佐藤を持ち上げ、地に叩きつけた。

「俺が。原江神拳の使い手の俺が。馬鹿な

佐藤は氣を失った。

近藤は箕輪を担いで歩きだした。

(廢人無職青年を取り逃がし、箕輪君は失神。今回は作戦失敗である。今日のところは大人しく帰るしかないのである。日を改めなければである。しかし、もづゼロからの呼び出しには応じないだろう。どうしたものか)

近藤は今後の天誅作戦について思案した。

第六章 知る人ぞ知る男からの報せ

東京虎ノ門に居を構える崎岡研究所。原野伸介はそこで働く事務員であった。某私大の政経学部を卒業した二十五歳である。原野は五條瑛の小説『鉱物シリーズ』の登場文物・葉山隆の影響で情報分析官に憧れたが、それは果たせなかつた。その代わりといつては何だが、外交・安全保障分野の情報提供を仕事とする崎岡研究所に事務員として就職した。所長の崎岡久彦は元外交官で、保守派の論客として知られていた。

「原野君、お客さん。受付にいるよ」

一回り年上の事務員が原野に言ひ。

「誰ですか?」

「会えばわかるつて。何でも大学時代の大親友だとか」

「大親友…………。今行きます」

原野にも思い当るところがなかつた。席を立ち、受付へと向かう。
受付にその男はいた。丸顔で眼鏡をかけ、二重顎。小太りでもある。

「谷垣…………さん、どうしてここに?」

一瞬さんづけを迷つた原野だった。谷垣直人は大学時代に同じ授業を受講した関係で、少しだけ親しくなつた間柄であつた。大親友

とほどても言えない。」こつは何を誤解しているのかと原野は思った。

「おお、原野君、おひさ。実は」

「帰ってきます?」

原野は谷垣の言葉を遮り、退場勧告を告げる。

「それはないんじゃないの? まだ何も言っていないし」

「ひたえる谷垣。

「今仕事中ですから」

原野は谷垣に背向け、自分の席へ戻ろうとする。

「ちよっと待てよ」

谷垣がたまらずその肩を掴んだ。

「今俺はやばいんだよ。助けてくれよ。友達だろ?」

「私と谷垣さんの関係ってそういう関係でしたつけ? 私が考え違いをしてるんでしょうか。別にそう親しくはなかつたと記憶してますけど」

「俺は命狙われてんだよ。少しの時間でいいから、ここにかくまつてくれよ。な、いいだろ、伸ちゃん?」

「伸ちやんて、随分馴れ馴れしいですね。やめてもらえます？ そんなの、警察にでも駆けこめばいいじゃないですか？ それか、お父さんに助けてもらえばいいのでは？」

谷垣が渋面を作った。

「警察の世話にも、親父に助けも借りたくない。頼む原野君、俺を助けてくれ！」

「谷垣さん」

原野が谷垣の顔をまっすぐに見つめて言つた。

「ああー！」

「仕事の邪魔でしかないので、帰りましょうね。何度も同じこと言わせないで下さい。それじゃ失礼

原野は谷垣を残し、立ち去つた。

「くそ！ お前なんて呪つてやるぜ！ 覚えとけ！」

近藤は携帯電話の画面で廃人無職青年のブログを見ていた。箕輪は箕輪の自宅にきちんと帰宅させていた。近藤が読んでいる記事のタイトルは、『また問題発言をしてしまった・・・・』所詮たかがアニメのキャラ名。覚えて何になる？笑。』。

俺はとんでもない悪役だな。あれだけアニメを見ておいて、この台詞。全アニメファンを敵に回しかねない発言だ・・・・・。

近藤は眉間にしわを寄せ、険しい表情だ。

(問題発言をしたと書いておきながら、削除も打ち消し線も撤回も謝罪もなしとは。この男、とても反省しているとは思えないのである。やはり、悪徳工作員たるもの、鈍感で無神経にして無反省な性格でなければ、務まらないということなのか。恐れ入る限りなのである)

近藤は携帯から目を離し、天井を見上げ、腕を組んだ。考え方をするときの近藤の癖である。

(どうやってこの男を誘いだせば。もつぜ口の手は使えないのである。どうすれば・・・・・・)

近藤の携帯が鳴った。メールの着信音だ。メールが届いたのか。いつたい誰からかと近藤が携帯を操作する。送信者は「知る人ぞ知る男」。近藤に覚えはなかつた。

「これは…」

近藤は知らず知らずのうちに声を発してしまつていた。

あんたが追つてる男、廃人無職青年の本名は谷垣直人。東京の有名な高級住宅地で両親とともに暮らしている。

そのメールには、廃人無職青年の自宅の電話番号と住所が書かれていた。

（事実なのかどうか、確認する必要があるのである。しかし、「知る人ぞ知る男」とは、何者・・・・・・）

近藤は送信者の正体を考えて見たが、いつこうに見当もつかなかつた。

（送信完了。これでよかつたんだよな？）

「知る人ぞ知る男」関根哲夫は携帯電話を閉じた。関根はかつて悪魔に操られて廃人無職青年を襲おうとしたが、別人を襲い、逆に取り押さえられて逮捕された二一トであった。

「ああ、そうだ。よくやつてくれた。これでまた、面白くなる」

関根は悪魔ゼパルの命令で近藤にメールを送っていたのであった。谷垣直人の身に、再び危機が迫る。

第七章 三つ巴

谷垣は原野に断られたため、仕方なく自宅へ帰っていた。

(原野の奴め、今から呪いに呪いまくつてやる。覚悟しろ)

谷垣はドアを開け、玄関へ一步足を踏み入れた。

「おひ、やつと帰ってきたか。待つてたぜ」

佐藤が玄関で立っていた。かと思ひと素早く谷垣に近付き、腹にパンチを放った。

「うぐー！」

谷垣がうめき声をあげ、膝を屈した。

「おいおい、勝手に休むなよ」

佐藤が谷垣の髪の毛を引っ張り上げ、顔を上げさせる。

「いいかあ、直人、お前の所為でなあ、俺はひでえ目に遭ったんだよ。あんなわけのわからんガキにやられて、俺のプライドはズタズタだ。もう生きていけねえかもなあ。このまま死んじまおうかあ。・・・・・なわけねえ！ おいこら、あいつらどこの誰だ？ なにもんなんだ？ 教えねえとマジでぶつ殺すぞ？」と言え」

「あの男は、ネットでは『俺はゼロ様』と名乗っていた」

「はあはあはあ。・・・・・で？ それだけかよー。」

佐藤の拳が谷垣の腹に食い込んだ。

「ぐふつー。」

「もつと他になんかねえのかよ？ 殺されてえか？ 僕はマジでアツタマきてんだよ。お前、死ぬよ？」

「あ、エロアドレスで、誰だかわかるかもしれない」

「エロアドレスか。なら、さつととやれ！ ぶち殺すぞ！」

佐藤は谷垣の尻に蹴りを入れ、調べるよう促した。

「へー、廃人無職って谷垣直人って名前だったのか。誰からの情報？」

河村が近藤に聞いてきた。近藤は今、携帯電話で河村と廃人無職青年について話していたところだった。

「それが、わからないのである。ただ、『知る人ぞ知る男』としか」

「『知る人ぞ知る男』？ それはわかんねえな。誰だろ？ ・・・ま、いいや。・・・春雄さん、確かめに行くんだろう？」

「うむ。できるだけ早く確かめなければならないのである。時が経

ては経つせど、日本アニメ滅亡は早まるのである。

「やつは誰つたどわあ、せんとこあいつが日本のアニメを潰やつとしてんのかなあ？ 僕はじつもやつは思えないんだが」

「間違いないのである。あの男は、ブログだけでなく、2ちゃんねるでも反日本アニメ工作活動を展開しているに違いないのである！ こうしてこる間にち、今までに日本アニメは滅びの日を迎えるとしてこるのである。断固阻止すべし、である！」

「わかったよ、もつわかったからわ。それで、いつ行くんだ？」

「明日こでも行こうと春雄は考えているのである。ゼロも来てくれるか？」

「明日か・・・・・。いいぜ。今度は僕も行く。箕輪さんは来るのか？」

「箕輪君は佐藤なる男に頭を蹴られたばかり、連れていくわけにはいかないのである。これは、春雄とゼロ、一人だけの秘密なのである」

「やつこいつとなり、わかった。箕輪さんこな内緒にしておひ

「これが『俺はゼロ様』とやらのエヤか」

佐藤が谷垣が操作するパソコンを覗き込んでくる。

「俺の知り合いで、いつこの辺に詳しいのがいるんだよ。そういう当たりでみる。じゃあな、クソガキーツ」

佐藤は谷垣の部屋から出て行った。

（くつそー！ 一発も殴りやがって、あの糞野郎！ 死ねよ！ 呪つてやるー！ 待てよ。原野も呪うんだった。今田は忙しいな）

谷垣はノートとハサミを取り出し、呪殺作業を開始した。

「関根、お前の働きのお陰で、谷垣は明日、近藤たちの襲撃を受けたことになった」

悪魔ゼパルは関根に満足気に語りかけた。

「特に何もしてないがな。そうか。あいつ襲われるのか。ざまあねえな」

関根も愉快そうに頬を歪めて笑った。

「どうだ関根、お前も身に行つては？ 面白いものが見られるかもしれんぞ？」

「んん？ それは楽しそうだが、俺も巻き込まれるんじゃないのか？ 面倒は御免だぜ」

「何かあれば、俺が助けよつ

「あなたは信用なんねえな。あなたのせいで俺は犯罪者になつちまつたんだし」

「ほひ。やうか。それなら、お前との関係もこれつきりだな

ゼパルが冷淡に言つた。

「ま、待てよ、それは困る」

関根が慌てふためいた。孤独なニートである関根にとって、ゼパルは貴重な話相手であつたのだ。

「まあ、いいだひ。許してやる」

「ふひ

関根が安堵する。

「見物つてひうせひてするんだ? 僕は望遠鏡とか持つてないぞ?」

「その点はら配ひらない。俺に考え方ある」

谷垣・佐藤、近藤・河村、ゼパル・関根。三つ巴の戦いが、今幕を開ける。

第八章 夏の刺客

河村は谷垣直人宅の最寄り駅の改札に立っていた。そこで近藤と待ち合わせることにしたのだ。河村は予定より十分ほど早く着いていた。

(早く着き過ぎちまつたな。この格好じゃあ、恥ずいぜ)

河村はテレビアニメ『コードギアス 反逆のルルーシュ』シリーズのゼロのマスクをつけ、青のTシャツに短パンという服装で、ちぐはぐと言えた。

「…………ゼロ。ゼロ」

河村がぼーっとしていると誰かが声をかけてきた。その人物を見つめる。サングラスをかけ、麦わら帽子に肩まで伸びた長髪、口髭に泥鰌鬚。

「は？ 誰？」

「春雄である」

「は、春雄さん！？ どうしたんだその格好は！？」

俺の格好もやばいが、こいつも相当だぜ、と河村は思った。

「春雄は廃人無職青年に顔を見られてしまっているのである。そのため、変装をしてきたというわけである」

「ああ、やつこつ」とか。びっくりしたぜ」

「ゼロ服? やはりゼロ服まだだったのだ?」

「かいちまつたんだ。それで今、クリーニング出してる」

「やうが。しかし、剣はもつてきてよかつたのではないか?」

「あー、やべえ! 忘れた……」

近藤がやれやれと肩をすくめた。

「まあ、いいじゃねえか。剣なんかなくても、俺は強こわいぜ。ほんやあたたたたまわりやあちょーー拳をなめるなよ?」

「つむ。ゼロの活躍、期待しているのである。でも、行くのである」

近藤が歩き出す。

一人はお皿類の物を見つけた。

「いいである」

確かに「谷垣」と表札がある。

「でかくて立派な豪邸じやねえか。あこつの父親は何やつてんだ?」

「それは春雄にもわからないのである」

「どうすんだ? ここで奴が来るのを待つか?」

「むむむ」

近藤が難しい顔をして腕を組む。

「おい、なんか乞食がいるぜ」

河村が顎をしゃぐる。その方向には、薄汚れた半袖のシャツを着たホームレスの姿があった。

(本当に来た!)

関根は興奮していた。

「当たり前だ。俺には未来が見えるのだ」

河村が見た乞食は関根の変装した姿であった。関根は近藤たちと谷垣の戦いを特等席から見物しようと、乞食に身をやつして谷垣邸前に段ボールを敷き、陣取っていたのである。

関根はこのために準備を整えていた。まず、新品のワイシャツを土で汚し、髪と付け髪を買った。今の関根は誰が見ても、頭がぼさぼさ、髪もじやしもじやの乞食にしか映らないであろう。それくらいの出来栄えであった。

(さあ、何が起ころんだ。俺にお前たちのアホを加減を見せてくれ)

関根は騒動が起ることを切に望んだ。でなければ、いつまでいた意味がない。

「あちいなあ」

河村がぼやく。

「出でこないじゃん。だりいなあ。クソ暑いし。・・・・・死ぬ。このままじや死ぬな」

「確かに暑いのである。春雄は夏は苦手なのである。早く終わってくれることをいつも願わずにはいられないのである」

近藤が額に浮き出た汗をハンカチで拭う。ふいてもふいても、玉のよしの汗はどんどん湧き出てきていた。

「春雄さんもか。俺も暑いのは嫌いだな」

河村も首の汗をハンカチで拭い取った。

(こつら何無駄話してんだ。早く行けよ！ 突っ込め！ 殺せ！)

関根が心の中ではやしたてるが、むろん現実には何の力も及ぼさ

ない。

「すげえ汗。 不味いぜ。これは不味いよ」

河村がいつになく真剣な声色で叫んだ。

「うむ。不味いのである。不味すぎるのである」

近藤も同調する。

(何が不味いってんだよ。俺にとっちゃ、お前らがただぼけーっと谷垣の家の前で突つ立つてるのが不味いよ。てんで不審者だらうが。チャイムでも鳴らせ。そして谷垣をぶつ殺せ!)

関根は焦りの色を浮かべた。

「こままじや脱水症状だぜ？ 夏は水分補給しないとな。ぶつたおれちまつ。なんか飲もう。一時撤退だ」

「うむ。賛成である」

一人は谷垣邸から離れ、駅の方へと向かつた。

(なんなんだこいつらは。そんなもん、最初から買つとけよ。馬鹿か、馬鹿なのか)

関根はただただ二人の行動にあきれりしかなかつた。

第九章 反撃の兆し

谷垣邸の玄関に男たちが集まっていた。谷垣、佐藤、それに佐藤が呼び集めた男たち。スキンヘッドに、角刈り、鼻と耳にピアスの男、眉毛なし、時代遅れの感があるリーゼントに、パンチパーマ。六人の男たちは、みな一様に目つきが悪かった。こんな奴ら、どこから連れて来たんだと谷垣は訝つたが、それだけで、表情に出すことさえ憚られた。また佐藤に殴られてはたまらない。

「さっきも言つたが、じゃあ俺はテツヤ、ソヨシと一緒に河村英樹の家に行く。テルヒコたちはこの馬鹿についてつてその辺ぶらぶらしてくれ。もしかしたら、河村たちが何か仕掛けてくれるかもしれないからな。そのときは、殺さない程度にいたぶってやれ」

「リョーカイっす、清さん」

テルヒコといふ名前らしいピアスが返事をする。俺はこいつと一緒に行動しなければならないのかと思うと、谷垣は絶望的な気持ちになつた。

関根は玄関から谷垣たちが出てくるのを阻撃した。

(出できたー 出できあつたよー ビリの俺!/? 奴らに知らせるか)

関根は慌ててポケットから携帯を取り出した。

(どいつが谷垣なんだろう?)

「顎が二つあって、坊主頭、丸く太った顔の男だ」

ゼパルが的確に説明する。関根はゼパルの指摘通りの男を発見した。

(あいつか。そうか、あいつが……)

谷垣たちは一手に分かれた。駅の方角とその逆。

(一緒にじゃないのか? ······まあいい。とにかく知らせないと)

「だからさあ、言つてんじやん。断然ボカリだつて」

駅の方へ歩きながら、河村は近藤に力説していた。

「いや、春雄はアクエリ派である」

「アクエリアスは苦いじゃねえか。どいつもいいんだ? そりぱりわ
かんねえ」

「確かにアクエリは苦いのである。だが、良薬口に苦口と云つではないか。代償を伴う分、それだけ水分が補給できるところなのだと、春雄は信じたいのである」

先ほどから二人は水分補給はポカリスエットかアクエリアスかという激論を戦わせていた。両者一步も譲らない。

「何で水分とのに代償を払わなければならぬんだよ。わけわかんねえな」

近藤の携帯が突然鳴りだした。

「誰だ？」

河村が問いかける。

谷垣が外出した。駅とは逆の方角へ向かつた。近くの遊歩道に行く模様。追撃せよ。 知る人ぞ知る男より

「知る人ぞ知る男からのメールであるー。 谷垣が動き出したのである！ 早く戻るのであるー！」

近藤は来た道を駆け戻る。

「おい、水分補給はどうすんだー！」

河村が大声で言った。

「や、そつだつたのである。早く何か買つのであるー。」

「わかつた！　俺がひとつ走り買つてくれー。春雄さんは先に行つててくれ！」

河村は自動販売機に駆け寄る。

谷垣邸へと急ぐ近藤は、向かってくる三人の男の姿を目にした。真ん中を歩く男に田が行つた。

（あの男は、谷垣と一緒に居た佐藤という奴である。いじめやりすいすのが好都合なのである）

近藤は俯いて走つた。

「おこおこおいおい、あんた、下向きながら走つてたらあぶねえじやねえかよ」

近藤の前にスキンヘッドの若い男が通せんぼとばかりに立ち塞がり、おどけて見せた。

「おじテツヤ、通してやれよ」

佐藤が苦笑している。しかし、テツヤは言つことを聞かない。

「お前何グラサンかけてんの？　かつこいこと思つてんの？　だせ

え。全然似合つてないぜ？ 偉そつと腰伸ばしやがつてや、お前何様だよ」

テツヤが顔と顔がくつつくほどに近藤に顔を近づけた。

「いい加減にしてくれなのであるー。急いでいるのであるー。どうしてくれなのであるー。」

たまらず、近藤が悲鳴を上げた。

「ここつぱーへつてゐよ。マジ殴けるんだナビ」

テツヤが手を叩いて笑った。

しかし、佐藤は厳しい顔つきになっていた。

「清さん、どうしました？」

「俺こいつの声と話しか、聞き覚えるんだよ。そんなに前じゃねえ。・
・
・
・
・」

佐藤が記憶を遡りひとつ田を開じた。

「そ、それでは失礼するのである」

近藤が無理に通りのとある。

「待てよ。ここを通すわけにはいかねえなあ。お前、何者だ？」

テツヤがぎりぎりまで近藤に顔を近づけ、凄んだ。

「あ！　こいつだよ、こいつ！　こいつが河村だ！」

佐藤が両目を見開いて、近藤を指差した。

「こいつが！　マジすか！　野郎！」

テツヤが聞合意を取つた。

「こいつ、変装なんかしやがつて。また直人の奴を狙うつもりだったんだろうが、そつはいかねえ。俺も仕事なんだよ。クビになつたら食つていけなくなる。お前には、この前の借りをきっちり返してやるぜ」

近藤は三人に囲まれた。

第十章 ポカリはアクエリを駆逐できるか

「気をつけろよ。俺はこいつにやられたんだからな。こいつは見かけによらず、なかなかできる」

佐藤がスキンヘッドと角刈りに注意を促した。

「マジですか。こんな奴に清さんがやられたなんて、俺信じらんないです」

角刈りが驚いた顔をする。

「清さんも調子が悪かったんじゃないですか。こいつそんな強いんですね？ 似合わねえロン毛に、今どきおかしいださい麦わら帽子、さらに似合わないグラサン、もっと似合わない髪。こいつのセンス、完全にこっちまっていますよ。こんなのに負ける気がしねえ。こっちは三人ですし。うわっ！ こいつ汗いっぱいかいてますよ。きつたねえ。こいつかなりびびってんじゃないですか」

テツヤがへらへらと嘲り笑う。

「誰から行く？」

角刈りが佐藤とテツヤに聞いた。

「もち、俺からだろ？ 清さん、こんな奴、俺が秒殺してやりますよ。そうですねえ・・・・・。十秒。いや、五秒。五秒もあればこいつを半殺しにしてやりますよ」

テツヤが不敵に笑い、豪語した。

「いいぜ。早くやつて見せろ」

佐藤が短く命じた。

「それじゃあ、遠慮なく

テツヤが拳を握りつつ、近藤との間合いを詰めた。近藤も身構え、警戒する。

「あふあー？」

突然、テツヤの鼻柱にペットボトルが直撃した。テツヤはそのまま後ろへ倒れた。

「なんだ！」

佐藤がペットボトルが飛んできた方角を見る。

「ぐほおつー！」

またもペットボトルが舞い、角刈りの鼻を打つ。角刈りも崩れ落ちた。

「一人相手に三人がかりとは、卑怯者どもが。そんな真似は、この俺が許さねえ」

「ゼロー！」

河村が立っていた。

「な、なんだお前はー!?」

佐藤は動転していた。

「俺か? 小賢しい悪党に名乗る名前はねえが、平成世直し救世主仮面ゼロ、ヒドも名乗つておくか

しつかり名乗つてこるではないか、と近藤は思った。

(一対一か。これは分が悪い。ここはひとまず退散するしかなさそうだな)

佐藤は瞬時に結論を出すと、谷垣邸へ向けて走り出した。

「覚えてやがれクソガキども! ここの借りは必ず返す! それまで首を洗つて待つとけ!」

「待てなのであるー、ゼロ、追いかけるのであるー!」

河村はと詫び、落ちたペットボトルを拾っていた。

「わかつてゐる

「そんなもの、ほつとけなのであるー!」

「これ一本五百円するんだぜ? これも金だよ。もったいねえ。
まじよ

河村が近藤に一本投げてよこした。

「…………ポカリではないか！ アクエリはどうしたのだ？」

近藤が詰問する。

「え？ わうだっけ？ まあ、細かいこと気にすんなよ」

河村は駆けだした。

（この男、絶対わざとポカリを買つてきたのである。しかし、春雄は改宗などしないのである）

河村の魂胆を知り、警戒する近藤であった。

（へつへつへつ。これでこいつもポカリ派に鞍替えだな。アクエリなんてまずにがいもん、飲み物じやねえ。俺はアクエリなんて認めねえ。ポカリさえあれば、十分だぜ。いずれ、アクエリはポカリによって驅逐されることは間違いないと俺は睨んでいる。春雄さんがアクエリ派やつてんのも、あとわずかだな）

河村は密かに近藤がポカリ派に転向するのを期待していたが、その可能性は低そうであった。

谷垣と佐藤の柄の悪そうな子分たちは、遊歩道を歩いていた。

（こんな奴らと一緒に居ては、俺もチンピラだと思われてしまう。

地獄だ。こつまでヤンキーもいればいいんだ。誰か、助けてくれ（）

谷垣は心中で悲鳴を上げていた。それが神に聞き届けられたのか、ヤンキーのひとり、眉毛なしの携帯電話が鳴り響いた。

「もしもし。あ、はい、佐藤さん。え！ 河村が現れた！ 二人連れですか。わかりました、今向かいます」

眉毛なしが携帯を切る。

「河村が出たらしい。佐藤さんは今、奴らに追われて谷垣家に帰つてゐるところだそうだ。俺らも歸るぜ」

「了解

不良どもは谷垣を残して、谷垣邸へと帰り始めた。

（佐藤が追われてる？ やまあ。俺を一発も殴るからだ。罰があたつたんだよ。あんな奴、殺されりやいいんだ。ひひひひひひひひひひひ。・・・・・今家に帰るのは危険だな。絶対奴らの戦いに巻き込まれる。ここは様子見だ。このまま散歩に行っちゃまえ）

谷垣は遊歩道の散歩を継続することにした。

見るからにチャンピリーロシキと思われる者たちが谷垣を置いていくのを関根は確認した。関根は谷垣たちの後をつけてきたのだ

(どうやら近藤たちと佐藤たちとの間で一戦起じたようだな。これで谷垣は一人。今ならやれるな)

関根は自分が勝手に事件を起こして逮捕されたにもかかわらず、そのことで谷垣を恨んでいた。今こそ恨み晴らすときということである。関根はズボンのポケットに忍ばせたナイフを取り出した。

第十一章 ヤンキー無念

関根はゆっくりと谷垣に近付き、背後をとると、話しかけた。

「おい」

「？」

谷垣が何だとばかりに振り向く。関根がバタフライナイフを握っていることを見ると、見る見る顔から血の気が引いていった。

「な、なななな、なんの用だ？」

谷垣は明らかに動搖していた。ふいにおかしさがこみ上げて来て、関根は吹き出してしまった。

「ふつ。・・・・・ここで会つたが何とやら、だな。廃人無職青年、本名・谷垣直人、俺はお前にちょっとした恨みがあつてな。そういうわけで、お前にはここで死んでもらうことになつた」

「何を言つんだ、あんた、氣でも狂つてるんじゃないのか！」

「狂つてる、か。そうかもな。俺は狂つてる。だが、それがどうした？ もうじき死ぬお前には、関係ないぜ！」

関根がナイフを手に、谷垣に向かつて駆けていく。

佐藤は谷垣邸に駆けに賭けた。息が上がっていた。額に汗が流れる。谷垣邸が田の片隅に見えた。

(あと少し・・・・・。あと少し。) うなりや、籠城だ。家に入れば、何とでもなる)

「待てよおっさん!」

「待つのあるー!」

麦わら帽子のグラサンとマスクがすぐそこまで迫つて来ていた。

(クソつー!) うら、はええな。追いつかれる!)

「あれ? 清さん?」

テルヒコだ。テルヒコ、マコト、タカシ、リョウタは佐藤と合流すべく、谷垣邸の前まで來ていたのだった。

「助かった。あいつらだよ! あいつらが河村だ! ぶちのめせ!」

ピアスのテルヒコがにやりと笑う。喧嘩が好きで好きでしようがない連中ばかりである。

「行くぞ、野郎ども!」

テルヒコが我先に走り出す。他の三人も走る。

近藤たちもテルヒコたちを認めた。

「むー、谷垣の仲間か！ ゼロ、この者たちは原石の手の者に違いないのである！ 成敗するのであるー。」

「おーー、やつたるー。」

「原石？ 何のことだ？」

テルヒコは意味がわからない。

河村が地を蹴り、飛んだ。

「はいやあたたたたたほわぢやあひょーー！」

河村の飛び蹴りがテルヒコの顔面に綺麗に決まった。テルヒコはその場に崩れ落ちた。

「てめー。」

眉毛なしのマコトが河村に殴りかかる。河村はマコトのパンチを一步退いて避け、拳を放つ。

「はいやあたたたたたほわぢやあひょーー！」

マコトの顔に河村の拳が埋まっていた。マコトも心中から倒した。

「まおおおおおおおおおおおおおおー、打倒破壊工作員なのであるー。」

近藤が両手をクロスさせ、Xの文字にし、リーゼントのタカシにタックルを狙う。タカシは寸前で回避した。

しかし、近藤が超反応を見せ、即座に反転、タカシに再度タックルする。今度はよけきれなかつたタカシは、民家の門扉に頭をぶつけて氣絶した。

仲間が次々と倒されるのを目撃したパンチパークのリョウタは、戦意を喪失させ、恐慌を起こした。

近藤たちに背を向け、逃亡を図った。

「リョウタ、どこ行くんだ!? 逃げんじゃねえ! 戦え!」

佐藤の叱咤もリョウタの耳には届かない。

一 残すはお前ひとりだぜ？」

河村が佐藤に歩み寄る。

「うしろへ」

佐藤も逃げ出した。河村が追跡にかかる。

「口才」そのものである。

「なんでだ？」

「我々の目的はあくまで谷垣征伐にあるのである。それを忘れてはいけないのである」

「やうだつたな。で、この後どうすんだ?」

「この家に侵入するのである」

「不法侵入になるぜ?」

「時には正義のために法を犯せばならないこともあるのである」

近藤は扉を開け、谷垣邸へ侵入した。

「じょうがねえ」

河村も谷垣邸へ足を踏み入れた。

第十一章 ポカリ飲まないから

関根は谷垣に一步一歩近づきながら、感慨に耽っていた。

（・・・・長かった。やつと俺の復讐は達成される。こいつだ。すべてこいつが悪いんだ。こいつの所為で俺の人生は狂わされたのだ。こいつと関わらざえしなければ、こいつのブログさえ読まなければ、俺は事件を起こして逮捕されることはなかつたんだ。こいつが！　こいつが！）

湧き上がる怒りの前に、関根は急速に理性を失つていた。

「全部お前が悪いんだよ、谷垣！　お前は俺に殺されなければならないんだ！　お前は俺に裁かれるべきなんだ！　死ねえー！」

関根がナイフを振り上げた。

「うええええええええええええええええ！」

谷垣はあまりの恐怖に身が竦み、身動きできなかつた。このまま斬り殺されると思い、目を瞑つた。

「おい直人、何をしている？　目を開けろ」

恐る恐る目を開けた。関根はナイフを振り上げたまま、動かない。まるで時間が止まつているようだ。

「俺が時間を止めたのだ。お前、ぱんぱんに膨れた小銭入れ持つてたうう？　それをこいつに投げろ

谷垣は幻聴の指図通り、小銭がいつぱい詰まつた小銭入れをズボンのポケットから取り出し、関根に投げつけた。

時間が戻つた。小銭入れが関根の右目(?)に当たる。

「…」

関根に激痛が走つた。顔を顰め、ナイフを落とす。

「何をした！ 何をしやがつたあああああああああああああ…」

関根が絶叫する。しきりに右目(?)を触つてている。

「ほり、今のうちだぞ。早く逃げる」

幻聴の言われるまま、谷垣は動いた。

「うあえあああああああああああああああ…」

わけのわからない声を上げ、谷垣はその場から走り去つた。

近藤と河村は谷垣邸の庭先に居た。一人は日陰になつている縁側に腰かけていた。

「でもさあ、やっぱ谷垣追いかけて遊歩道行つた方がよくねえか？」

河村が当然の疑問を口にした。

「甘いのである、ゼロ」

近藤が笑みを浮かべた。

「甘い? ビツヒツひつた?」

「確かに谷垣が遊歩道に向かつたことまではわかっているのである。しかし、それから先のことはわからないのである。この知る人ぞ知る男からもあれから連絡はないのである。それに、この猛暑である。あてもなく移動して、脱水症状で倒れてもしたら馬鹿馬鹿しいのである。それよりもむしろ」

「むしろひるいで谷垣が帰るのを待つた方が上策、といことだら?」

河村が答えを先回りして言つた。

「その通りである

「さすが春雄さん、冴えてるぜ。グッドアイデア」

河村が親指を立てて見せた。

「春雄は切れ者なのである」

三分後。二人は汗まみれとなつていた。

「あつちいなあ。陰にいるの、ビーフシチ悍だよへ。」

河村は盛んにハンカチで汗をぬぐつてゐる。

「今日は三十度いくといつ話である」

近藤の顔も汎えない。

「このままじゃ不味いな」

そう言つてポカリを口に含む河村は、近藤がペットボトルの蓋を開けていないことに気がついた。

「飲んでないのかよ、春雄さん。水分取らないとマジでやばいぜ？」

「春雄はアクエリ派なのである。甘つたるいポカリなど、口にはできないのである。アクエリは成人男性のための飲みものなのである。ポカリの如きお子ちゃん向けは、春雄はとても飲むことはできないのである」

「だからって」

「これは春雄のポリシーである。誰に何を言われようが、変えるつもりはないのである」

断固たる口調で近藤は宣言すると、春雄は立ち上がり、庭先に転がつていた大きな岩を取り、振りかぶる。

「何をするんだ？」

「もはやこれまでなのである。かくなるつえは、室内に侵入し、クーラーで涼しくして谷垣を待つ計画に作戦変更である」

「器物損壊に不法侵入だな」

冷静に河村が発言した。

—એવી અત્યારે આપણે કાંઈ કાંઈ કરીને જો હોય.

近藤が縁側のガラスに大岩にぶつけた。

けたたましい警報が鳴り響いた

「やべえ！ ガラスを割ると警報機が鳴る仕組みになつてたんだ！ はやくずらからねえと、警備員か警察が来るぜ！」 春雄さん、これは撤退だ！」

河村が門扉へと走る。

「無念なのである！」

悔しさに顔をにじませつつ、近藤も逃亡を開始した。

一人は駅へと走った。頭一つ分近藤より先を走る河村だったが、突然、近藤の気配が消えたのを感じ取った。慌てて足を止め、後ろを振り返る河村。近藤は歩道に倒れていた。

「春雄さん！」

近藤に駆け寄る河村。

「あ、気分が悪いのである・・・・・・ぐ。苦しい・・・・・・・」

近藤は血の気が引き、顔色が良くない。

「こりゃあ脱水症状じゃねえのか？だからポカリ飲めって言つたんだよ！」

近藤はがくりと頭を垂れた。失神したのだ。

「春雄――――――――――！」

近藤を抱えて、河村はあたりかまわず叫び声を上げた。

第十二章 白昼公園トイレの謎事

近藤が田を覚ますと、田の前には河村の姿があった。

「春雄さん、気がついたか？」

「…………」「は？」

近藤は辺りを見回した。病院のベッドのようである。

「俺が救急車呼んでもやつたんだよ。感謝しちよな」

「すまない」のである。迷惑をかけたのである

「無茶しやがって。ほら」

河村がペットボトルを近藤の手に握らせる。

「これは、アクエリアス！」

「そうだよ。好きなもん飲め。俺も悪かった。俺が無理にポカリなんか飲ませよつとしなきや、こんなことには」

「春雄をポカリ派にすることを、諦めたのか？」

「知つてたのか」

河村が少し驚いている。

「無論。わからぬ春雄ではないのである」

「さすが春雄さんだぜ」

二人は互いに笑い合つた。

谷垣は無我夢中でがむしゃらに走り回っていた。

（逃げるんだ！とにかく遠くへ！ ともないと、こゝ、殺される…）

「落ちつけよ直人。襲われたくらいで、何だ」

幻聴が冷たく言い放つ。この前聞いた時は家弓家正の声だったが、今は中田讓治の声になっていた。

（何だとは何だ！ 襲われたんだぞ！ おおいとだろうがー…）

谷垣は心の中で反論した。

「だが、大したなかつたろう？ 怪我したわけでもなし、何をそんなに慌てるんだ？ まあいい。それより、その公園のトイレに逃げ込むといい。そうすれば、さつきの奴には見つけられない。しばらく鳴りをひそめ、折を見て帰宅すればいいんだ。簡単だろ？..」

（確かだらうな？）

「確かに。俺は未来が見えると言つたろ？.. 俺の言つことを聞い

ていれば、お前は安全だ。」ここで生き延び、また面白くもおかしくもない、児戯に等しい小説もどきを好きなだけ書ける

（お前に憑しざまに言われる覚えはない。黙つとけ）

「さうか。しかしあ前も物好きだな。最近はお気に入り読者が減っていると騒いでいたが、それがお前が書いた駄作小説、はきだめブログの真実の評価なのだ。現実を受け入れろ」

（黙れってんだよ！　俺はここのままじゃ終わらない！　今にきっとお気に入り読者も前のようにな増やして見せる！　見とけ！）

谷垣はトイレに入った。個室が一つある。右の個室に入つて鍵をかけた。

「大した自信家だ。その自信がどこから湧いてくるのかがわからな
いが」

「はあ、はあ、はあ・・・・・・」

佐藤は息を切らせて走っていた。どれくらい走ったのか、自分がどこを走っているのか、掴めていない。とにかく夢中であった。

（どこかに隠れねえと。奴らに見つかったら、何をされるかわかつたもんじゃねえ。お！）

佐藤は公園にたどり着いた。そう言えば、ここは谷垣がよく歩く

散歩コースであることを想い出していた。

(「ひしおじりへ厄介になるか。まさか便所に隠れてるとは、奴らも通りまつこ）

右の個室は使用中だ。左の個室で立つてゐるといした。

谷垣は何者かの気配を感じ取った。誰かがトイレに入ってきたようだ。

(誰か来た！？)

「Iの近くの人間だわ。気にするな」

(そうだ。そうだな。何を焦つてるんだ俺は。いつこうぞはあいつが言つた通り、落ち着くしかない)

谷垣は息をひそめて、時間を過ぐることにした。

関根は腫れてきた右目を押さえながら、谷垣を追跡していた。

(谷垣の野郎、どこに行きやがったんだ。ここまできて、取り逃がすとはー、絶対探し出してやるー。あいつはハツ裂きにしてやらなきゃ、気がすまない)

いけどもいけども、谷垣の姿はない。右田の痛みも手伝い、関根もいら立ってきた。

「あいつを殺したいか、関根。その思い、俺が叶えてやる」

（奴の居場所を知ってるのか！ 教えてくれー）

「ここの先に公園がある。その個室でお前をやり過す准备のようだ

（公園のトイレ！ そんなところ！……俺を馬鹿にしやがって！ 俺が見つけられないとでも思ったのか！ トイレだと！ 馬鹿にしやかつて！ トイレンなんかに隠れただってこの俺からは逃れられないぜ、谷垣。俺を甘く見たつけは、高くついたな）

関根は目的の場所へと走った。

すぐに谷垣の隠れ場所は見つかった。

（どうしちの個室だ！ 一いつとも埋まつてる…）

「ああ。左だ、左。左に谷垣はいる」

（サンキューー！）

関根は思い切り個室のドアに蹴りを入れた。ドアが外れる。

「あんだけてめえはー！」

チンピラ風の男が立っていた。見覚えがある。ここは谷垣と一緒に谷垣家から出てきた奴だ。

(谷垣じゃない、だと?)

関根は知らず知らず冷や汗を流していた。

第十四章 知る人ぞ知る男、無残

(「の声は、佐藤！？ あいつがなぜここにいる？）

谷垣は個室の中で小さくなつた。無意識のつゝい、兀びの職の佐藤を恐れる心がそうさせたのだ。

「ん？ 違つたな。すまんすまん。俺のミスだ」

ゼバルがいい加減な口調で謝つた。

「さつき家の前に居た乞食じやねえか。何の用だよ？」

佐藤は関根が右手にナイフを手にしているのを田にとめた。

「おまえ！ 何でそんなもん持つてるー！」

「あ、いや、これは」

関根は突然のことじで、言葉が続かない。

(ナイフを持った乞食！ あいつだ！ その辺で俺を探し、ここまでやって来たのか！)

谷垣はがたがたと震えだした。谷垣は嫌いなまづの佐藤が乞食を倒してくれることを願う始末であった。

「お前も河村の一昧か!? 僕をつけてきたんだな! どこまでもしつこく俺をつけ狙いやがって! 僕が何したって言つんだよ! やけやがって! やられてたまるか! おらああああああああああああああああああ!」

佐藤の動きは素早かつた。佐藤が放った拳は関根の顔にめり込んだ。

「俺のたまとうなんて、百年はええぜ! 原江神拳なめんなよ、クソが!」

佐藤の拳は止まらない。関根の腹をえぐる。

「ぶふつ!」

胃液が逆流し、関根が涎を垂らす。

「お前みたいなチビデブの小汚ねえ乞食野郎が本気で俺を殺せると思つてたのか! やけんなよ。俺はそこまで弱くねえんだよ! おらああああああああああああああああああああああ!」

佐藤の飛び蹴りが関根の胸を襲つた。

「がつ！」

藤が蹴りを叩きこむ。 関根の体は壁に叩きつけられた。 倒れこむ関根の腹を、 さらに佐

「おひおらおらおらおら！ 倒れたつて、泣いたつて、喚いたつて、俺
は許せねえ！ 僕の命を狙つた報いだ！ おらああああああああああ
あー！」

(む二・・・・・。 せやく・・・・・。 俺を、助けてくれ・・・)

関根は悪魔に懇願した。

「助ける？ そんな約束、した覚えはないがな」

(・・・・・俺を騙したのか?)

関根の言葉に悪魔は耳を貸さず、

「関根、お前も終わりのようだな。下手すると、ここで死ぬかもな。
…………二十九か。短く、實に空虚で不毛な、下らない、つま
らない人生だつたな。まあ、それが一トらしいと言えば、言えな
くもないか」

突き放すような口調で言った。

悪魔の声が遠のいていく。根は意識を失つた。

関根の髪を掴み、佐藤が耳元でささやく。

「いいか！ 今度俺の命を狙つてみる？ こんななんじゅすまねえぞ
！」

佐藤が手を離し、トイレから立ち去つていく。

谷垣は生きた心地がしないまま、佐藤の関根に対する暴行を耳で
聞いていた。

関根はいなくなつたらしい。もつ氣配が感じない。ほつと息をつ
く谷垣。

（あこつ本当にキレると向するかわかな奴だな。こわ。まあ、
たすがのあこつも俺をぼくぼくにはできんだろうが）

「何やつてる？ 出るなら今のつけだぞ？」

（や、そだつた！ だが、今出て大丈夫なのか？ あいつが襲つ
てくれるんじやないか？）

「奴は気絶している。何もできん。だが、時間が立てば意識が戻る
可能性も高くなるな。このドアを蹴破つてお前に襲いかかるかもな
？ 逃げるなら今しかない。それとも、トイレで殺されたい願望で
もあるのか？」

（あるわけないだろ、そんなもん。お、俺は行くぜ。俺は生きるん
だ！）

谷垣は意を決して個室から出ることを決めた。

「生きるか。しかし、生きて何になる？ 生き延びたところで、変わり映えのしない、退屈な一ート生活が待ってるだけじゃないか。それに何の意味がある？」

(つるさいー そのうちバイトでも始めるさ)

谷垣は恐る恐るドアを開けた。ほんの数センチだけ。隙間から外を窺う。ぴくりとも動かない関根が目に入る。

「いよいよお前も一ート卒業か。しかし、それもフリーターが一人増えるだけの話だな。世界にとつてみれば、無に等しい行いだ」

(さつきから何なんだよお前は)

谷垣は出来る限りの力を振るい、猛ダッシュし、関根の前を通り抜けた。

「俺はお前の困ったところが見たいだけなんだ。もつと俺にドラマを見せてくれ。これまで以上に、お前の愚かさを見せて、俺を楽しませてくれ」

(やなこつた。面白い奴なら、俺以外にもいっぱいいるじゃねえか。世界には奇人変人キチガイ、痛い人、電波は溢れてる。どうして俺なんだ？)

「さあな。自分で考えてみたらどうだ？」

谷垣は家に帰るのはあまりにも危険なので、とりあえず、いつも
の散歩道をく歩くことにした。

第十五章 春雄の決意とアルプス天然水

近藤と河村が談笑していると、勢いよくドアが開き、箕輪が顔を出した。

「先輩！」

近藤が河村を睨みつけた。

「ああ、俺が話したよ。文句あるか？」

「…………余計なことをしてくれたのである。もつ起きて平氣なのが、箕輪君？」

「私なら全然平氣ですよ。問題は先輩ですね。先輩、こんなに暑いんだから、頻繁に水分は補給しなきゃ ジゃないです。ゼロさんから聞きましたよ。ポカリが嫌いだからって、せっかく買ってくれたのに飲まなかつたって。何考てんですか。ゼロさんに迷惑かけちゃダメじやないですか」

近藤はしゅんとしている。

「…………面倒次第もないのである」

「春雄さん、だつせえなあ」

河村は笑いをこらえるのに忙しい。

「ゼロさんもゼロさんですよ。どうして私に話してくれなかつたん

ですか？ 私だけ除け者なんて、あんまりでしょうが…」「

「「」、「めんな。箕輪さんは頭やられたって聞いて、休ましておいた方がいい」と思つて。春雄さんも黙つとけつて言つてしまふ。すまんかつた」

河村は素直に頭を下げた。

氣まずい空気が流れた。

沈黙を破つたのは箕輪だつた。

「もういいです。それより、先輩はいつ退院ですか？」

「明日はまだ退院できるのである」

「ああ。とにかく今日中は絶対安静らしい」

「それはよかつたですね。・・・・・・いつになりますか？」

「何を？」

河村が首をかしげた。

「廃人無職青年襲撃に決まつてるじゃないですか。先輩たち、今日もあいつを取り逃がしたんでしょ？ 早いところ始末しないと不味いですよ。ほつとけばほつとくほど、あいつのアニメ破壊工作が進行しちゃいます」

「ならば、明日、再度谷垣邸を襲うのであるー。」

近藤が決然と決意を述べた。

「明日とはまた急だな。病み上がりじゃねえか。やめといた方がいいんじゃねえの？」

河村が近藤の身を案じて言つた。

「そりですよ、先輩。わざわざああこまましたけど、やつぱり無理しない方が」

箕輪はトーンダウンした。

「箕輪君、君は思い違いをしているやつなのである！ これは一刻を争う事態なのである！ 春雄死すとも、アニメは死せず！ 死せる春雄、日本アニメを走らす！ アニメあつての春雄！ 春雄はこの命、アニメに捧ぐのである！」

「いや、先輩の覚悟はわかりましたけど

「ならば、止めないでくれなのである！ 春雄ヒAnimeは一心同体、運命共同体なのである！」

「ですが

なおも説得を試みる箕輪。

「まあまあ、もういいじゃねえか、箕輪さん。春雄さんの好きこそせてやれば。こんなに元気なんだし、大丈夫だつて。春雄さん、相撲で体鍛えてんだろ？ だいじょぶ、だいじょぶ。今度は俺も氣を

利かせて、ポカリじやなくアクエリ持つてくし」

「あー。」

箕輪が何か思い出し、バッグに手を突っ込んだ。

「どうした？」

「これ、先輩にあげようと思つて」

箕輪はペットボトルを取り出し、手渡した。

「はー、どうぞ。飲んで下さい、先輩」

「有り難く受け取るのである。はー！ これはー。」

近藤が驚き、大きく口を開けた。

「な、なんだよ？」

「・・・・・アルプス天然水である」

「え？ 嫌いでした？ なんかそれしかなくて。病院の自販機で買つたんですけどね」

「いや、嫌いではないが。むしろ、ポカリよりはましだと春雄は思うが。ただの水に百五十円も払うのはどうかと春雄は考えるのである」

「えー、そうですか。じゃあ、水道水の方がよかつたですかね」

「そういう問題でもないのである」

「いいから飲んで下せこよ。せつかく買つてきたんですから」

春雄はるアルプス天然水に口をつけた。喉をつたつ。

「どうです?」

「・・・・・水である」

「当たり前じやん」

河村が呆れたよつて言つた。

第十六章 ネットでの猛攻

翌日。正午に近藤は退院した。退院にて、河村や箕輪が駆け付けた。

「先輩、退院おめでとうございます。大事に至らなくて、真面目に良かったです」

「だな。俺の適切かつ迅速な通報の賜物だぜ」

「一人とも、ありがとうなのである。さて、ゼロと箕輪君には、やつてもらいたいことがあるのである」

「え？ そのまま廃人無職青年の家に行くんじゃないんですか？」

箕輪がぽかんとした顔をしている。

「そうだよ。昨日再度襲撃するつて言つてたじやんか。忘れたのか」

「忘れてはいけないのである。作戦変更である。あの家には警報装置がつけられているのである。侵入しても、すぐに警察や警備員が来てしまうのである。外で見張つっていても、出でくるかどうかはわからないのである。それならば」

「それなら？」

河村が先を促す。

「外に出るよつて仕向けることが肝要なのである。そのために、谷垣のブログを荒らし、挑発、外出をせるのである。そしてそこを狙

「なるほどな。いいんじゃねえの」

「私も賛成です。家に帰つて荒らしコメント書き込めばいいんですね？」

「そうである。準備ができたら春雄に知らせて欲しいのである。二人同時攻撃を行うのである」

「それでは、諸君の健闘を祈るのである」

近藤が敬礼して見せた。一人も敬礼を返した。

河村は帰宅し、パソコンを起動させ、谷垣のブログにアクセスした。近藤に早速電話する。

「俺だ。今谷垣のブログを見る。いつでもいいぜ」

「了解である。箕輪君も配置に着いたと連絡があつたのである。やれでは、戦闘開始なのであるー。」

近藤が号令を出す。

「オッケー。ゼロ、いつきまーす

(と書つたものの、どこから攻めたらしいものか、迷うな)

「廃人」一ートは小説を書けるか?」の記事数はけつこうな数であった。

「春雄さん、どうからいつたらいいのかわからんねえ。なんかアドバイスねえか?」

「うむ。それなら、この男の自称伝説や過去に行つた悪事・失言・問題発言を攻撃すればよいのではないだろ?」

「了解。サンキュー」

「廃人無職青年 伝説」は複数あつた。ヘタレ伝説、変態伝説、懇願アクセス乞食伝説である。失言・問題発言としては、エヴァつまらん発言、たかがアニメ発言、アニメキャラレイープ期待発言などがあつた。

河村はそれらを批判するコメントを書き込んでいく。読むたびに、谷垣に対しても悪い印象をもつた。

(こじつけマジで馬鹿な奴だ。しかも開き直っている。どうしようもない)

「大体書き込んだ。次は?」

「お疲れである。それよりもゼロ、春雄のMSNメッセを開いてくれなのである。今箕輪君とチャットしていたところなのである」

「おこおこ、そういうことは早く教えてくれよな

「すまないのである」

河村はメッセージを開き、チャットに参加した。

お。ガロをさらにひねー。ついたつを余しましたよね

ね。箕輪さんは何してんだ？

私はこここの小説叩いてますよ。ほんと叩くといひだらけですね。台詞ばっかりで、こんな小説じゃないですよ。あと、こいつ、なんか削除してる記事があるんですよね。都合の悪いことは証拠隠滅、臭いものには蓋つてわけです。なんで、そこも責め立てます。それから、アクセスに無茶苦茶拘つてるとこよりも大いに攻撃できるかと。とにかくこここの、おかしなところだけです。相当な変人ですよ。

そうか。さすが箕輪さんだ。やつ手だぜ。俺なんかもう攻めるところないや。箕輪さんも助言頼む。

えー、ここにこんなに馬鹿なのが、もつ呪けませんか？
・・・やうですねえ。ここが一ートのといりとか、いけるんじ
やないです。

河村は自身も一ートであるため、その手は思いつかなかつた。そ
して、あまり熱心にその点を責め立てる気は起きなかつた。

箕輪は完全に自分が一ートであることを棚に上げてこる」と云ふ
がつかないでいた。

そうだな。そこはあれてたわ。助かったぜ。

びつこたしまして。

河村は自分の中の葛藤と闘っていた。近藤や箕輪は知るはずもなく、一人は黙々と荒らしコメントを書き込んでいた。

第十七章 廃人無職青年の受難

谷垣は昨日、散歩した後、再び原野が勤務する崎岡研究所へ足を運んだ。

「また来たんですか。なんなんですかあなたは。もつといい加減にしてくださいよ。私は一ートのあなたとは違つて、仕事があるんですよ。それにこの前、私のこと呪つてやるとか言つてませんでした？ どういう風の吹きまわしなんですかねえ」

谷垣の顔を見るなりこれだ。

「あのときは動搖しててだな、想つてもいない」とを口走つてしまつたんだ。すまない」

「そうですか」

原野は鼻で笑つた。

「聞いてくれ！ 俺はまた襲われたんだよ！ 今度はお食にやられた！」

「生きてるじゃないですか

原野が呆れた顔で言つ。

「辛うじて助かつたんだよ！」

「そうですか。なんか嘘臭いですね。作り話でしょ？」

原野があからさまに疑つた田で見つめてきた。

「嘘じやねえよ！ 本当なんだよ！ 頼む、信じてくれ！ そして俺を助けてくれ！」

「だから警察に行かつて言つてるじゃないですか？ 普通そいつあるでしょ？ 何か間違つてますか？」

「いいからさ、今日はお前んちに泊めてくれ！ 家には帰れないんだよ！」

「嫌です」

きつぱりと原野は否定した。

「俺が殺されてもいいのか！」

谷垣が詰め寄る。

「知りませんよ。一回も襲われて生きてるじゃないですか。どうせ死にませんで」

原野は仕事に戻つていった。

失意の谷垣は自分が知つている限りの場所に行き、時間を潰すことにした。特に目的のない移動である。原宿、渋谷、池袋、新宿・・・。ただふらふらと徘徊してまわつた。その生氣の抜けぶりは、まるで生きた屍、人形のようであった。

ついには行くところがなくなってしまった。また同じ場所を行く気力もない。仕方なしに、家に電話して様子を聞いてみることにした。どうもなれば帰宅するつもりであった。

「もしもし？」

佐藤が不機嫌そうな声で応対してくれた。

「直人です。異常はありませんか？」

「異常だあ？　iji-jinとこ、おかしなことだけだらうが！　全部お前の所為なんだよ、このクソガキが！」

電話が切れてしまった。

「異常はないんじやないのか？　家に帰れるぞ。よかつたな」

またしても幻聴が話しかけてきた。

谷垣は無視した。

とほどほど歩いていると、家に着いていた。誰かにまた襲われないか、びくつくながらの帰路であった。しかし、杞憂であったようで、何事もなく帰宅した。気が重いが、鍵を開け、家に入る。

「おひ。帰ったか。待つてたぜ」

佐藤が手ぐすね引いて待ち構えていた。

谷垣はすぐに自分の部屋へ連れて行かれた。ドアを閉めるなり、

佐藤が殴りかかつってきた。

鈍い衝撃が腹に伝わってきた。十数発続けざまに殴られた。谷垣は息もできない有様だつた。

「お前の所為で一度もひでえ目に遭わされたんだ。本当なら、こんなもんじゃ済まねえが、これで勘弁してやる」

佐藤は退出した。

佐藤から解放された谷垣はそのままベッドに倒れ込んだ。体が恐ろしく重く、そしてだるい。

谷垣はそのまま眠りに落ちた。

目が覚めた。時計を見ると、十一時半だつた。寝過ぎだなと自分でも思った。起きようとしたとき、腹がすきりと痛んだ。昨日佐藤に殴られた箇所が痛むのだ。

何とか起き上がる。すきすきと痛むが、タオルを持って洗面所へ行き洗顔する。次に歯磨き。味噌汁とご飯の朝食をとる。

「暢気なものだな、直人」

谷垣は相手にしない。

「無視か。そんな態度でいいのか」

思わせぶりな幻聴の言葉が気になった。

(何だよ?)

「お前のブログ、大変なことになつてゐるぞ」

(なに!?)

谷垣は箸を置き、立ち上がる。

「おいおい、行つたつてどうにもならん。飯ぐら、落ち着いて食
え」

谷垣はまっしぐらに自室へ向かい、パソコンを立ち上げた。アメ
ーバブログにログインする。

(ーー)

谷垣が目にしたもの。それは信じられないほどのコメントの数だ
った。

「新章に突入、というわけだ」

幻聴が冷静に告げた。

第十八章 ノメントによる心理戦

谷垣は恐る恐るノメントを読み始めた。

「愉快なノメントがたくさんついてるぜ。よかつたじゃないか」

幻聴が冷やかした。

前科者の癖にブログをもつなよ。反省してんのかお前。 そんなお前に、この俺が正義の筆誅を下す！

ハンドルネームは「平成正義仮面」となっていた。

美人だからって、人の顔じろじろ見るなよ。お前常識ねえなあ。普通にキモイぜ。そしてエロい。今度から廃人工パートと名乗れ。わかったな？

アニメの女性キャラクターのレイプを期待するとか、やつぱお前は犯罪者的性格だ。お前は危険だよ。ちやんと精神科医に話しどけ。

しまいにいや、アクセス乞食か。落ちぶれたもんだな。アクセス乞食なんて、みんな嫌いだよ。お前のような奴に、ブログをする資格はない。今すぐ閉鎖しな。

W杯日本負けるとか、お前何なの？　お前あれだろ？　みんなが一体となつて一生懸命になつて、それに自分が入つて行けなくて、寂しいんだろ？　悔しいんだろ？　みつともないぜ。

たかがアニメ？　お前は俺を怒らせた。アニメファンとして、
許せん！　取り消せ！

お前二ノートの癖に一人前の口をきくなよ。そういうのはな、ちゃんと働いてから言つべきものなんだよ。二ノートは発言するべからず！

小説の記事には、「超美人」というハンドルネームの人物が何件もコメントをつけていた。

本当、廃人クンの小説はつまらん。つまらな過ぎる、ほんと。どうやつたらこんなに下手糞にできるの？ うーん、わかんない。台詞ばかりだしね。描写はどうした、描写は。風景とか全然書いてないよね？ 書けないの？ ジヤ、もうやめたら？ そんな小説家、聞いたことないよ。はい、小説家失格。

廃人クンてさ、よく台詞に！つけるよね。何で？ なんかがきつぽいよね？ そう思わない？ 何歳だっけ？ 十代じゃないんだよね？ ならさ、もつとちゃんとしようね。読んでてつらいものがあるよ。とにかく、！とか、いらんからw

廃人クン、下手なのを開き直るのはいかんよ。けしからんな。実にけしからん。そういう考えでは、上達せんよ。上達する気ないんだっけか？ うまくなりたくないの？ なんだかねえ。そういう

消極的な性格だから、二ートなんかやつちやつてるんだろうねえ。

駄目だな。駄目駄目だな。

何でさ、廃人クンの小説に出てくるキャラは二ートが多いの？ 自分が二ートだから？ どういう読者を狙ってるの？ やはり二ート？ もっとまともな層を狙おうよ。そういうこと考えてる？ 二ート活躍させて楽しい？ そうだよねえ、二ートなんて、リアルじゃ何にもできないもんね。廃人クンも社会の何の役にも立っていないよね。だからせめて、小説の中だけでも、活躍させてあげたいよね？ うん、わかるわかる、その気持ち。気持ちはわかるんだけど、やはりアリティないよね。二ートはあんなに強くないからw

「新撰組局長」というハンドルネームからのコメントも相当数あつた。

まったく、あなたは何というおぞましき、邪悪な人間なのだ。私はあなたほどの悪人を知らない。あなたほどの加減でふざけてばかりで幼稚な人間を、知らない。初めての体験だ。私は生まれて初めて、あなたののような人間がこの世にいることを知った。大いに戦慄し、恐怖した。あなたはとてつもなく異常な人格の持ち主だ。間違いは正されなくてはならない。あなたは即刻、精神科に行き、医師に相談し、その大いに問題のある人格を治療するべきなのだ。

そうだそうだ、局長の言つとおつだぜ。お前は狂つてゐる。ち
つとも入院しない。

そういう。廃人くんどうせひきこもつでしょ？ 病院行く
ついでに、散歩でもしてきたりいんじやないの？ 外に出て、人
と接して、世間の厳しさを身をもつて知るべき。

ヒッキーは外に出とけ。そして世間を知れ。

超美人さんや平成正義仮面さんの仰る通りだ。廃人君は引き
こもりなのだから、もっと積極的に外に出なければならない。これ
を読んだらすぐに外出するように。

「メントは他にも多数ついていた。すべて、平成正義仮面、超美
人、新撰組局長のものであった。

（なんなんだよ、こいつらは！ いらねえメントたくさんつけやが
つて！）

谷垣の頭は完全に沸騰していた。

第十九章 春雄の責任

「メント荒らしに立ちを隠しきれない谷垣。追いかけるよつて佐藤が姿を見せた。

「お前が家に居るところなどねえんだよ。つぜえから、わざとどつか行け。パソコン何かやつてんじやねえよ、タロ」

佐藤が強引に谷垣を部屋から追い出し、玄関へと連れて行く。

「まひ、出い。遅くまで帰つてこなぐでいいぜ」

「また奴らに襲われるかも……」

「お前のことなんか知るか。俺はもうどうだつていーんだよ」

佐藤は谷垣を玄関に残し、立ち去つていった。

「メントは大賑わい、今度は外の空気を吸つてこことは、これまた随分楽しくなってきたじゃないか、直人。いいことづくめだな」

谷垣は仕方なく靴を履き始めた。

箕輪さん、キャラ変わつてんじやん。

そうですね。リアルと同じじゃつまらないじゃないですか。
ネットにはネット、リアルにはリアルの顔があるんですよ。

春雄さんは口調が違うな。語尾に「である」つけねえの？

春雄は馬鹿ではないのである。であめなびとつけたら、すぐ
に春雄だとばれてしまつのである。

確かにな。

ふと河村は重大な疑問が思い立つた。

春雄さん、俺たちみんな家でパソコンしてんだぜ？ 谷垣が

外出したとして、どうして奴を襲つんだ？

あ！ もうですよ。どうすんですか、先輩？

フフフフフフフフフフ。実は春雄は今、春雄の家からネットに接続しているわけではないのである。

どういたよ、それは。

春雄は今、谷垣家の前に止めた車の中に入るのである。

何だつて！

ええええええ！

河村も箕輪も大いに驚いた。

一人でやるつもりなのか？

その通りである。もともとこれは春雄言いだしたこと、春雄
が片をつけるのが、筋というものである。

そんな！ 水臭いですよ、先輩！

一春雄は一度もしくじつてしまつたのである。すべては春雄
の失態、春雄が責任をとらなければならないのである。自分で蒔い
た種は、自分で刈り取るべきなのである。

—最初の時は私だつていたじゃないですか

—箕輪君を痛い目に遭わせてしまったのは、春雄の責任なのである。

—一度田は俺も一緒にたひ？ 谷垣を逃がしたのは、俺のミスでもあるんだぜ？

—いや、春雄が悪いのである。

—何でも自分で背負い込まないで下さりよ。

— そうだよ。

— 谷垣が出てきたのである。春雄は行くのである。後でまた連絡するのである。それでは春雄は落ちるのである。この問題の決着をつけるのである。また会おうなのである。

— 待てよ春雄さん！

— 先輩！

春雄からの返信は途絶えた。

— 僕、今から谷垣邸に行くよ。

一
私
毛。

谷垣は数歩歩いてすぐ、

「谷垣直人！」

と呼びとめられた。嫌な予感がしたが、とにかく振り返る。そこには、「俺はゼロ様」と名乗った眼鏡男が立っていた。

「世間は皆が何をやるか知らぬが、お前はお前らのことを知らぬ。」

眼鏡男は谷垣に向かつてきた。

「いよいよお前の人生も最終章に行きついたというわけだ、直人」

幻聴が縁起でもないことを言つてきた。

第一十章 世界一―ト帝国初代皇帝の誕生

谷垣は眼鏡男の突進を見るや否や、身を翻し、脱兎の如く逃走を図つた。

逃がすか！ 三度目の正直なのである！」

眼鏡男が叫び、地面を蹴った。眼鏡男の飛び蹴りが綺麗に谷垣の背中に入つた。

「おおべへ！」

谷垣はつんのめつて転倒、顔をぶつけた。鼻血が滴り落ちた。

眼鏡男が谷垣の肩を掴み、自分の方に顔を向かせた。

「アーティストである」

張り手が顔に飛んできた。

「俺が何をしたって言うんだ！」
俺に何か恨みでもあるのか！」

「しらばつくれても無駄なのである！ 貴様は原石慎太郎が放った
破壊工作員であり、日本の漫画とアニメを滅ぼそうと日夜工作に勤
しんでいることは既に露見しているのである！」

「何の」とだよー

କାହାର କାହାର କାହାର କାହାର କାହାର କାହାର କାହାର

！」

凄まじい連續張り手攻撃が谷垣を襲つた。谷垣は氣絶してしまつた。

谷垣が失神したのを確認すると、眼鏡男は呟いた。

「終わったのである。これですべて。片をつけることには成功したのである。ゼロと算輪君に報告しなければなのである」

眼鏡男は車へと急いだ。

「あつけない幕切れだな。直人らしいと言えばらしいが。しかし、俺はそれでもつまらんのだ。これでは物足りんな。もっと楽しませてほしいものだ」

近藤の耳に、突如第三者の声が聞こえてきた。

「なに！ 誰なのであるー！」

近藤が振り返るが、倒れている谷垣がいるだけだ。

(誰もいないのである。今の声はいったい？)

「近藤春雄、お前などには俺の姿は見えんよ。お前もこれでおしまいでは退屈だろう？ 俺がもっと面白くしてやろう。・・・・・ 谷垣直人、お前に力を授けてやろう。思う存分に暴れるがいい」

突然、谷垣の目が見開かれた。

「…」

近藤が啞然としている。

「ぐおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお… 力が！ 体中に力が！ 今まで体験したこともない力が、俺の体を駆け廻っている…」

「そうだ。俺がお前に力を与えたのだ。もはやお前は無敵、お前の望みで叶わないことはない。試しに空を飛んでみたらどうだ？」

谷垣が空を飛べと思つと、谷垣の体は空中浮遊した。

「ば、ばかな！ 空を飛べるだと…」

近藤は驚きの連続であった。

「直人、気分はどうだ？」

「最高だ。このうえもなくいい気分だ。お前に感謝する」

「お前は力を手に入れた。その力で、この星を支配するといい

「それはいいかもな。谷垣帝国でも作るとするか。…………いや、それではあまりにありきたりすぎてつまらないな。…………世界帝国。…………世界二ート帝国！ これだ！ 俺は世界二ート帝国初代皇帝となるのだ！ フハハハハハハハハハハハハハ

「ハハ！」

「それもいいだろ？。しかし、皇帝ともなると、容姿に優れていなければな。今のお前では、厳しいかもな。容姿を変えた方がいいぞ。お前が思つ理想の容姿にな」

「そうだな。・・・・・それなら、『黒執事』のセバスチャンになつてみよう」

『黒執事』は極やなが描く、パラレルワールドの十九世紀英國を舞台とした、アクションコメディ何でもありの執事漫画である。セバスチャンは主人公の名前だった。

谷垣の容姿がみるみる変化した。髪はさらさらで光沢を放ち、真ん中分けとなり、小太り気味の腹はひつこんだ。怪しい色気を発する美青年が誕生した。

「ば、ばかな！」「んなことあるはずが！」

近藤はまたまた驚き、完全に我を失つていた。

「どうだ、近藤とやら？ 肢が羨ましいか？ そうであろう？ フハハハハハハハハハハハハハハ！」

谷垣は喋り方までもが変わってしまった。

「た、確かに、羨ましいのである！ しかし、こんなことは反則なのである！ 世界一ート帝国？ 貴様は皇帝の器などではないのである！ 馬鹿な真似は今すぐやめるのである！」

「嫌だな。お前の声「ひ」など聞かぬ。止めたいたいのなら、朕を止め
てみるとよから」

「降りてここなのであるー。」

「なぜお前と同じ土俵で戦わねばならぬ？ 馬鹿馬鹿しいの。ほ
れ」

谷垣が近藤を指差した。指から強い突風が巻き起し、近藤を襲
つた。

「うぬー。」

近藤は十数メートル吹き飛ばされ、地面に叩きつけられた。近藤
は動かなくなつた。

「なんと、一撃とはな。造作もない。朕はこのような弱者に張り手
を食わされていたのか。馬鹿馬鹿しい限りじや」

「その通りだ。だが、まあ、気にするな。お前はもうかつてのお前
ではない。まあ、氣を取り直して、世界征服とこいつじゃないか」

「ふむ。まずはどうすればよい？..」

「何はともあれ、演説だろ。電波ジャックし、テレビやネットで
世界一アート帝国の建国と皇帝即位を訴えるのだ」

「なじば、参るつかの」

谷垣は谷垣家前から飛び立つていった。

第一十一章 「全世界のインターネットへ壁なし」

「エリへ向かっている?」

「テレビ局に」

「そんな必要はない。ここからでも電波ジャックは可能だ」

「やうなのか?」

「念じるのだ」

谷垣は言われた通り念じてみた。谷垣の脳裏にテレビ画面に映し出された自分が映つた。

「全世界のテレビ局をハックした。さあ、演説だ」

「地球の民よ、心して聞け。朕は・・・・・・」

(谷垣直人のままでいいんだろうか?)

「ありふれた名前だな。この際だ、改名した方がよいだろ?」

(しかし、よいものが思いつかない・・・・・・)

谷垣は思いもがけないことで躊躇始めた。

「お前の今の容姿は、何をイメージしたものだつたんだ? 思い出せ」

(『黒執事』のセバスチャン…………。そうか！ セバスチャン小野大輔…………。いや、セバスチャン大輔…………。セバ大輔…………。瀬羽大輔！ これだ！ 僕の新しい名は、瀬羽大輔だ！)

「朕の名は瀬羽大輔。世界二ート帝国初代皇帝である。朕はここに、二ートの二ートによる二ートのための世界帝国建国を宣言する。これは建国宣言並びに皇帝即位宣言である。…………全世界の二ートに告ぐ。二ートは今まで、社会からの迫害や偏見、蔑視に耐えてきた。それは二ートであるがゆえの、回避できぬ試練であつた。我々二ートは社会の最底辺に位置し、その地位に甘んじてきた。唯々諾々と社会からの差別を受けなければならなかつた。そしてそれは二ートである以上、ずっと続くものと思われた。しかし、それが間違つてゐることを、朕が証明する。今日より、世界史は、人類史は、地球史は塗り替えられる。地球上の二ートの歴史も変貌を遂げる。万国の二ートよ、団結せよ！ もう耐え忍ぶ時期は終わりを告げたのだ！ 二ートよ、武器をとり、戦え！ 社会が我々を否定するなら、逆に社会を否定してやるのだ！ 新しい社会を作ればよいだけなのだ！ 二ートはもはや被差別者ではない！ もはや社会のお荷物ではない！ もう有り余る時間をアニメやゲームや漫画や同人誌で潰す必要もないのだ！ 我々二ートは決起し、国を建てるのだ！ 二ートのためだけの帝国！ それこそが世界二ート帝国なのだ！ 国籍は二ートであるなら、誰にでも与える！ 朕とともに新たな歴史を紡ごうではないか！ まず手始めに、朕の親衛隊である近衛師団を創設する。午後一時半、日本武道館にて結団式を執り行う。朕は待つてゐる。入団希望者は遠慮なく参加してもらいたい。以上だ」

「演説は大成功だな。これでたくさん親衛隊員が生まれる」

「建国後は何をするつもりだ?」

「そうだな。俺だけが楽しめるアニメや漫画、ゲームを大量に作らせよう。俺の写真集も販売しよう。詩集もいいな。当然、小説も文庫化だ。写真集・詩集・小説は法律で国民に強制的に買って読むよう義務付ける」

「いたれりつくせりだな。瀬羽大輔の天下じやないか」

「俺は今までの人生が惨め過ぎた。今から俺は俺の人生を取り戻すのだ」

「けつこうなことだ。・・・・・そろそろ武道館に行かないか。

「ああ」

「何もわざわざ飛んでいくことはないぞ。武道館をイメージし、瞬間移動すればいいのだ。やってみる」

瀬羽大輔は武道館をイメージした。瀬羽の姿は消えた。瞬間移動したのである。

河村は走っていた。目指すは谷垣家。

「ゼロさん！」

箕輪が河村の後を走っていた。

一飛はしていいくせ！」

「了解です！」

道端に倒れこんでいる近藤を一人は発見した。

春雄さん！」

一
先輩！

二人は近藤の近くに座りこんだ。河村が近藤の頬を叩く。

近藤がつめき声を上げる。意識が戻ったようだ。

「何があつたんだ、春雄さん！」

「谷垣にやられたのである。・・・・・奴は空を飛び、指から風を引き起こし、春雄を吹き飛ばしたのである」

「そんな馬鹿なことが……。あいつはエスパーかよ」

河村は半信半疑である。

「いや、近藤が言っていることは本当だぜ」

聞き覚えのある声。

「…………岩崎文太か！」

岩崎文太は右翼一ートテロリストで、政治家大量虐殺テロを敢行し、自殺した人物であった。

「覚えててくれてありがとう。そうだよ、俺だよ俺。俺はしつかり近藤が谷垣にやられるところの田でばっちら見たぜ」

「いつたいどういうことなんだ？　あいつは何の変哲もない、しない冴えない、駄目一ートのはずなのに・・・・・・」

「悪魔だよ。ゼパルという悪魔が奴に力を与えたんだ。それであいつは超人・魔人の仲間入りというわけさ」

「そんなことがりえるんですか？」

箕輪もにわかには信じられない。

「俺がこいつしてお前らと話しているのも、俺がサタンの眷属だからだよ。・・・・・そんなことより、聞いてくれ。奴は今さつき電波ジャックをして、世界一ート帝国建国宣言と皇帝即位背説を全世

界に向けて行つた。奴は世界二ート帝国といつもの建国し、自分がその初代皇帝に収まるつもりでいやがる。皇帝になつたら好き勝手して遊んで暮らすつもりなんだよ。俺はそんなの気に食わねえんだ。二ートはみんな、独立自尊、皇帝とかそんなもん、要らねえはずなんだ。しかもあいつには理想はない。ただ大将になりたいだけなんだ。つづづく下らねえ。あんな奴に國を作らせちゃ駄目だ。お前ら善良で正義感に溢れた二ートがダーク二ート谷垣を止めるんだ。俺もバックアップする。奴はこれから親衛隊結団式を日本武道館で開くつもりだ

「わ、わかった。俺たちが谷垣を止めてやるぜ」

河村、近藤、箕輪はそれぞれ頷いた。

第一十一章 一万人のヒート奴隸

瀬羽大輔は日本武道館に現れた。空を漂つている。

「さすがにまだ誰も来ておらんようだな」

「そうでもないぜ、谷垣直人、いや、瀬羽大輔！」

「何者ー！」

瀬羽は声の主を見つめた。三人の男女の姿が瀬羽の目に入った。

「貴様は『俺はゼロ様』こと河村英樹、それに近藤春雄に、箕輪晴子か。そろいもそろつて二ートばかり。貴様らも朕がこれから築く帝国に入りたくなったのか？」

「馬鹿言つんじゃねえよ！　俺はお前の馬鹿な野望を打ち碎くためにやつてきたのさ」

「打ち碎くだと？　これはまた大きく出たな。貴様らは超能力者か何かなのか？　否。そうではない。所詮ただの人間に過ぎぬ貴様ら如きに、朕が倒せるものか。・・・・・　貴様らを倒す前に、まずはショータイムだ」

瀬羽が指を鳴らす。突然、男が出現した。

「な、なんだここのー！？　俺は家に居たはずだ」

佐藤清であつた。

「佐藤、貴様はよくも朕を何度も何度も殴りまくつてくれたな。今その礼をしてやるひうだー。」

瀬羽が手を突き出すと、風が舞い、佐藤の体を持ち上げた。

「う、うおああああああああああああああああ！ 何がどうなつてんだ！」

佐藤は座席に激突し、びくともしなくなつた。

「さて、次だ」

今度は病院で病人が着る服のようなものを着た男が現れた。関根哲夫であった。

「！ なに！ 何が起こつた！」

「関根哲夫。貴様はあらうことか朕を一度も襲つた。その罪、万死に値するー。」

関根の体も宙を舞つた。床に叩きつけられ、気絶した。

「まだまだ」

ワイシャツにネクタイをした若い男が登場した。

「え？」

原野伸介だ。

「原野伸介、貴様は助けを請う私を一度も見捨てた。許しがたい」

「あんた誰ですか？ あ！」

原野も風に飛ばされ、地面にぶつかり、気を失った。

「お前、そんなことして楽しいかよー。」

河村が怒りに燃え、大声で怒鳴った。

「ああ、楽しい。実にな。肩どもを始末するのは楽しくてしょうがない。今度は貴様らの番だ。だが、朕自ら手を下すのでは、面白みに欠ける。ここは親衛隊の諸君に始末してもううどじよ。出でよ、近衛師団ー。」

瀬羽が号令を下すと、途端に武道館がひとでいっぱいとなつた。

「あれ？ あれれれれれれれれ！ どうなつてんの？」

「俺は家でエロゲーやつてたはずなのに。なぜここに？」

「僕は2つをやつてた」

「漏れは二つ動見てた」

「うううううう、何が何やら」

「なにこれ？ 超能力？」

「おーい、どうこい」とだよ、誰か説明しろ」

瀬羽の力によって一万人の二ートが集められたのだ。

「二ート諸君！ 諸君を朕は待っていた！ 世界二ート帝国建国者・初代皇帝の瀬羽大輔である。諸君には、栄えある近衛師団になつてもらいたい。喜べ。諸君は選ばれたのだ」

瀬羽の声に、一同沈黙した。しかし、すぐに静寂は破られた。

「はあ？ 近衛師団？ 世界二ート帝国？ じいつ何言つてんの？ つつか誰？」

「真性キチガイ登場。誰か精神病院連れてつてやつて

「あいつ見ろよ！ 空飛んでるぜ！」

「どうせトリックだよ、トリック。もちつけ」

「何が帝国だよ。笑わせんな。お前なんか皇帝だつて認めねえぞ」

「そりだそりだ。皇帝なんかやめちまえ。とにかく、二ート帝国なんか要らん。俺は入らない」

「何でもいいから、エロゲーの続きをやらせろー。」

「200- 200-」

「二ト動- 二ト動-」

「帰れ！　帰れ！」

つこには帰れ「一ルまで繰り出した。

「な、なぜだ！？　朕はお前たちの味方　といつに！？　朕を裏切るのか！？」

瀬羽の顔が青ざめた。

「裏切るも何も、お前のこと知らんじ。ほんとこいつ誰？　なにせやつてる奴？」

「知らんよ。そんなのどうでもこいから、早く帰らせや」

「帰りせりー！　そしてお前は引ッしやー！」

「あ、貴様らー。」

瀬羽が歯ぎしりし、右の拳を力いっぱい握りしめた。

「いらっしゃるな、瀬羽。お前力あるんだからね、ここいらなんか乗っ取つてしまえばいいのだ。そうだろ？」

「その手があつたか！　フ、フフフフ、フハハハハハハハハハハハハハハハハハハ！」

「おい、なんかあいつ、笑いだしたぜ？」

「どうどう壊れたか

「いや、元からじやね？」

「瀬羽大輔が命じる！ 貴様らは、朕の奴隸となれ！」

瀬羽からまばゆいばかりの光が溢れ出し、武道館を覆い尽くした。

「はい、皇帝陛下。我々は陛下の奴隸でござります」

一万人の一ートたちが一斉に言つた。

「なんて野郎だ、谷垣、てめえ！」

河村の怒りの炎はさらに燃え上がった。

最終章 廃人無職青年成敗

「命令だ！」二人を殺せ！』

「はい、皇帝陛下」

二一トたちが一斉に動き出す。河村たちに周囲の二一トたちが襲いかかって来た。

「はいやあたたたたほわぢやありよーー！」

河村が必殺拳を送り、ひとつの二一トを倒した。

「じすこである！」

近藤も張り手を繰り出す。

「めーん！」

箕輪は竹刀を振る。

「つて、いくらなんでも、一万対三じや勝ち目ないですよー」というか、ゼロなんて河村英樹つて名前で、しかも二一トだったんですね。まさかうわうと二一ト友だつたとは

箕輪が悲鳴を上げつつ、河村を興味深げにしげしげと見つめた。

「俺もびっくりだよ。春雄さんや箕輪さんも二一トだったなんてな

「うむ。道理で仲が良かつたのである」

「暢気で喋っている場合じゃないんですよ。どうですかー？」

三人が話している間にも、わらわらと一ートたちは襲い来る。三人は輪を作り、防戦していた。

「俺を忘れるなよ。バツクアッPするつて言ったろ？」俺が力を貸してやるぜ！」「

河村の服装が様変わりした。Tシャツに短パンだったのが、ゼロ服へと変わっていた。腰の剣もプラスチックのそれではなく、西洋の剣になっていた。それだけでなく、とてもつない力が河村に湧き上がってきた。

「それはエクスカリバー、オリハルコンで作った聖剣だ。強力な風で敵を攻撃することができる。今だけお前に貸しといてやるよ」

「うなぎの棒を握る手が、うなぎの棒を握る手だよ。」

河村がエクスカリバーを一振りすると、竜巻の様な風が巻き起こり、二ートを軽く数百人吹き飛ばした。

「何！ なんだあれは！ あの剣は何なんだ！」

瀬羽は動搖を隠しきれない。

「ちょっとそれ凄い使えるじゃないですか！」ゼロさんばっかりず
るいですよ！ 私にも貸して下さい！」

「悪こな、これは俺専用だわ。」
おおおー。」

河村はエクスカリバーを振りまくつた。そのたびに二ートたちが
多数飛ばされ、次第に数を減らしていく。

「おのれ河村英樹！ 許せんぞ！ 俺血ちり蟲の根止めてやるー。ふ
ほおおおおおおおおおおおおおおおー。」

瀬羽が右手を突き出し、河村目掛けて風を送り出す。

「河村、瀬羽が風で攻撃し来た。こつちもエクスカリバーで風を起
こし、対抗するんだ」

河村も瀬羽の方角を狙ってエクスカリバーを振るった。

「へー、なんざいだー。ふくらはぎの筋肉が痛いんだよ。おおおおー。」

今度は瀬羽は両手を突き出した。両手から風が巻き起こる。

「河村、飛べ！ 飛ぶんだ！」

河村は自分の足元にエクスカリバーを振るい、風を起こし、空を飛んだ。

「なに！ なんて技だ！」

河村は瀬羽が起こした風に向かっていく。

ଅ ଅ ଅ ଅ ଅ ଅ ଅ ଅ ଅ ଅ ଅ ଅ ଅ ଅ ଅ .—

エクスカリバーを振り下ろす。瀬羽が作り出した風は一つに割れ

「なんだとおー！」

瀬羽は目を見張った。信じられない展開であつた。

河村は瀬羽にどんどん接近してきた。

来るな！ 来るんじゃない！」

瀬羽はひつきりなしに河村に風を送つたが、河村は悉くエクスカ
ベーバード行ノ二。

河村が目前に迫つて来た。瀬羽の顔が恐怖に歪んだ。

谷垣一
一トに上も下もねえ！

河村は瀬羽の脇を抜いた

「この俺が！　世界二ート帝国建国者・初代皇帝の俺が！　たかがただの二ートなどに倒される！？　俺の写真集・詩集・小説の野望が！　悪魔、何とかしてくれ！　お前の力ならなんとかなるはずだ！　また二ートに逆戻りは嫌だ！　またブログのアクセスに一喜一憂する生活を送らなければならないのか！　頼む、助けてくれ！」

「知らんな。やれやれ、魔王陛下の眷属とはいえ、元人間に俺の楽しみを邪魔されるとはな。・・・・・直人、有頂天になつてたお前は見ていて面白かつたぞ。じゅうあな。後は自分で何とかしろ。気が向いたらまた話しかけてやる」

「ま、待て！」

みるみる瀬羽は地面へと落ちていく。

「う、うああああああああああああああああああああああああああああああ！」

瀬羽は地面に落下した。落下の衝撃で瀬羽は気を失った。瀬羽は谷垣直人に戻つてしまつていた。

「おひつ、どうですか？」

箕輪が河村と近藤に聞いた。

「もひ、いいんじゃねえ？　あいつは十分罰を受けてるはずだ。十分すぎるほどにな

「同感なのである。！　ゼロ、元の姿に戻っているのである。」

河村のゼロ服もエクスカリバーも消えてしまっていた。

「あー、ほんとだー！」

「返してもらつたよ。みんな、よくやつてくれた。これで二一トの平和は保たれた。元二一トとして、俺も大満足だ。それじゃ、また

それきり崎の声は聞こえなくなつた。

「また助けてもらつたな」

「ええ。あの人、大量虐殺右翼二一トテロリストだけど、いい人なのかも」

「うむ。何はともあれ、一件落着である。・・・・・それでは、マックにでも食べに行くか？」

「いいですね。行きましょーう」

三人は並んで歩きだした。

「いててて。なんだつてんだよ、まつたく」

佐藤は起き上がり、辺りを見渡す。

「なんかいっぽいいるなあ。さつきは全然いなかつたのこ。わけわ
かんねえ」

「いつてー。何で俺がこんな田に。マジいてー。俺は病人なんだよ、
たく

病室から抜け出して来たような男が佐藤の田に飛び込んできた。

「あー。お前、あのときのえー食ー」

「ー。やべー」

関根は一田散に逃げ出した。佐藤も後を追った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0560m/>

『廃人無職青年成敗物語』

2011年10月6日16時31分発行